昭和副讀本 巻五

4a
810
昭6

41705
教科書文庫
4
810
41-1931
20000
90690

資料室

4a
810
昭6

昭和六年一月三十日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

保科孝一編

昭和副讀本

廣島大學
藏
90690
圖書

育英書院發行

昭和副讀本　卷五目次

十訓抄

一　淀のわたり……一

二　香爐峰の雪……二

三　小式部内侍……四

四　成就院の僧正……五

古今著聞集

一　頼光朝臣……七

二　衣のたて……一二

保元物語

一　新院御遷幸……一六
二　新院御經沈……一九
平治物語
一　六波羅合戰……二三
二　義朝敗北……三一
三　義朝野間下向……三三
平家物語
一　祇園精舍……三八
二　殿上闇討……四〇
三　月見……四六
四　富士川……四八
五　入道逝去……五五

六　實盛最後……五八
七　那須與一……六三
增鏡
一　實朝の死……六八
二　後嵯峨天皇……七二
太平記
一　主上笠置を御沒落……七九
二　赤坂の城軍……八六
徒然草
一　つれ〴〵なるまゝに……九八
二　此の木なからましかば……一〇〇
三　しばしの旅……一〇一

四　過ぎにし方……一〇二
五　人の亡きあと……一〇三
六　雪のあした……一〇四
七　荒れたる庭……一〇五
八　馴れたる人……一〇六
九　賀茂のくらべ馬……一〇七
一〇　いかなる人なりけん……一〇九
一一　稲葉の露……一〇九
一二　いもがしら……一一一
一三　道風のかける朗詠集……一一三
一四　猫また……一一四
一五　花はさかりに……一一五

一六　世には心得ぬことの多き……一二〇
一七　最明寺入道……一二三
一八　佛はいかなるものにか……一二四

昭和副讀本　卷五

十訓抄

作者不詳、三卷。橘成季であるといひ、菅原爲長であるといふも確說でない。十條に分つて、敎訓的に古人の事蹟を書き集めたもので、序文によつて建長四年になつたといふことは明かである。

一　淀のわたり

俊頼朝臣語りて曰く、「白川院、淀に御方違の行幸ありけるに、五月ばかりのことにやありけん、女房・殿上人の舟あまたありけるに、曉になるほどに、向ひのかたに郭公一聲ほのかに鳴きてすぐ。俊頼一首詠ぜまほしくおぼえしに、女房の舟の中に忍びたる聲にて、『淀の

俊頼　藤原氏

淀　山城久世郡、淀川に臨む

淀のわたり云々　いづかたに鳴きて行くらんほとゝぎす淀のわたりのまだ夜ふかきに（拾遺集）

俊賴筆蹟
いさゝめの時待間ぞ日は經ぬる心ばせをば人に見えつつなし、なつめ、くるみ
忠房が家の兵衛
あぢきなしなげきなつめそうきことにあひくる身をばすてぬ物柄（モノカタ）
一條院
六十六代の天皇

わたりのまだ夜ふかきに』と詠められたりし、時に臨みてめでたかりき。人々感歎して今にわすれず。あたらしくよみたらんには

まされり」となんいはれける。

（第一）

二　香爐峰の雪

一條院、雪いとおもしろく降り

たりける朝、端近く出で居させ

給ひて、雪御覽じけるに、「香爐峰

のありさまいかならん」と仰せ

られければ、清少納言御前に候ひけるが、申す事はなくて、御簾をお

しあげたりける、世の末まで優なる例にいひ傳へられけり。かの

白樂天
唐の詩人

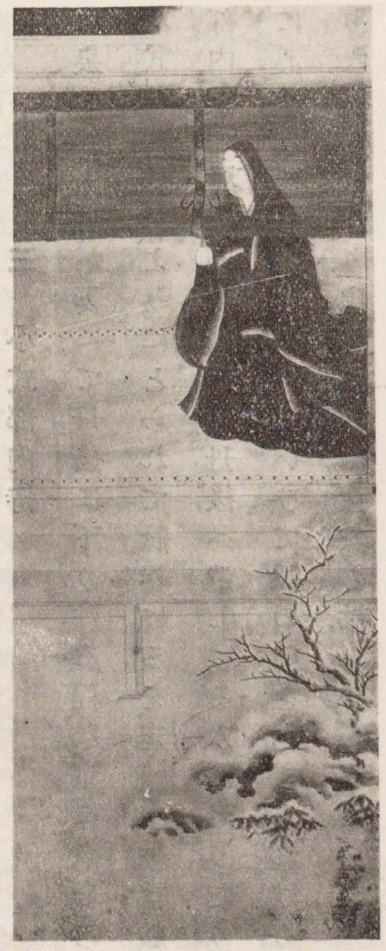
天曆
村上天皇の御代

梨壺の五人
大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城

香爐峰の事は、白樂天老の後、この山の麓に、一の草堂をしめて住みける時の詩に、

遺愛寺鐘欹枕聽（ヘテ）（キ）、香爐峰雪撥簾看（テヲ）（ル）

とあるを、帝仰せ出されけるにより、御簾をばあげけるなり。か



清女捲簾之圖

の清少納言は、天曆の御時、梨壺の五人の歌仙の内清原元輔の女にて、その家の風吹き傳へたりける上、心ざまわりなく優にて、折につ

けたるふるまひ、いみじき事多かりけり。（第一）

三　小式部内侍

小式部内侍
和泉式部の女

保昌
藤原氏、丹後守

定頼
藤原氏

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りける程に、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌よみにとられて詠みけるを、定頼中納言戯れて、小式部内侍の局にありけるに、「丹後へ遣しける人は参りたりや。いかに心もとなく思すらん」といひて局の前を過ぎられけるを、御簾よりなからばかり出でて、僅に直衣の袖をひかへて、

大江山いくのの道の遠ければ
まだふみも見ずあまの橋立

とよみかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに、かゝるやうやはある」とばかりいひて、返歌にも及ばず、袖をひき放ちて逃げられけり。小式部、これより歌よみの世におぼえ出できにけり。これはうちまかせて理運の事なれども、かの卿の心には、これほどの歌、只今詠み出すべしとはしらざりけるにや。（第三）

大江山
山城と丹波の國境にあるいくの
丹波國

四　成就院の僧正

仁和寺の大御室
三條天皇の皇子性信法親王
仁和寺中興の祖

成就院の僧正
源師賢の子寛助

白川の九重の御塔
白川の法勝寺の塔

京極大殿
藤原師實

仁和寺の大御室の御時、成就院の僧正のいまだ阿闍梨と申しけるころ、白川の九重の御塔供養ありけり。御室、「この度の賞あらば、必ずゆづらん」と御約束ありければ、畏り申し給ふほどに、思の如く供養遂げられ、賞行はるゝ時になりて、京極大殿の御子息、阿闍梨にて、御弟子にて候ひ給ひけるに、大殿御對面のついでに、「この度の賞は小法師にこそ賜り侍らめ」とかねてより悦び申し給ひければ、仰せられやるべき方なくて、法眼になり給ひにけり。御室は、かの阿闍

梨いかに口惜しと思ふらんと胸ふさがりて思し召しけるに、その日ふつと見えざりければ、「さるらん、若し修行に出でたるか、又うらめしさのあまりにや」と思し召し亂れたるに、日高くなりて、御前に出でたりけるに、あやしく思し召して、「何處へ行かれたりつるぞや」。と仰せられければ、「新法眼の御悅にまかり侍る」と打聞えて、つゆも恨みたるけしきもなかりけり。御室うれしくも哀に思し召しければ、この度こそ越えられにけれども、次々の勸賞あまたゆづりて、僧正までなりて、鳥羽院の御時は、生佛（イキボトケ）と思し召しければ、世を我がまゝにして、法師關白とまでいはれ給ひけり。いみじかりける人なり。（第九）

賴光、賴信

多田滿仲 賴光 賴信

公時 賴光の臣、坂田公時

古今著聞集

二十卷。作者は橘成季である。古今の新事逸話を記述した書で、建長六年に成つたものといふ。

一　賴光朝臣

賴光朝臣、寒夜に物へありきて歸りけるに、賴信の家近くよりたれば、公時を使にて、「只今こそ罷り過ぎ侍れ。此の寒さこそはしたなけれ。美酒侍るや」といひたりければ、賴信朝臣、折ふし酒飲みて居たりける時なりければ、興に入りて、「只今見んやうに申し給ふべし。この仰事によろこび思ひ給へ候。御渡りあるべし」といひければ、賴光則ち入りにけり。

盃酌の間、賴光廐の方を見やりたりければ、童を一人いましめておきたりけり。あやしと見て、賴信に、「あれにいましめておきたるも

鬼童丸
當時の山賊

のはたぞ。」と問ひければ、「鬼童丸なり。」とこたふ。 頼光驚きて、「いかに鬼童丸などを、あのていにはいましめ置き給ひたるぞ。 をかしあるものなれば、かくほどあだにはあるまじきものを。」といはれければ、頼信、「實にさる事候。」とて、郎等を呼びて、猶したゝかにいましめさせければ、金鎖(カナグサリ)をとり出でて、能く逃げぬやうにしたゝめけり。 鬼童丸、頼光宣ふ事を聞くより、口惜しきものかな、何とぞあれ、夜のうちに、この恨をばむくはんずるものをと思ひ居たりけり。 盃酌數獻になりて、頼光も醉ひて臥しぬ。 頼信も入りにけり。

夜ふけしづまる程に、鬼童丸究竟のものにて、いましめたる金鎖ふみ切りて遁れ出でぬ。 狐戸より入りて、頼光の寢たる天井の上にあり、この天井引きはなちて落ちかゝりなば、勝負すべき事異儀あらじと思ひためらふ程に、頼光も、たゞ人にあらねば、早くさとりに

綱
頼光の臣、渡邊綱

鞍馬
京都の北方一五粁餘の處にある山

市原野
京都から鞍馬への途中にある

けり。 落ちかゝりなば大事と思ひて、「天井にいたちよりも大きに、貂よりも小さきものの音こそすれ。」といひて、「誰か候。」と呼びければ、綱、名のりて參りけり。 「明日は、鞍馬へまゐるべし。 いまだ夜をこめて、是よりやがて參らんずるぞ。 某々供すべし。」といはれければ、綱承りて、「皆是に候。」と申してゐたり。

鬼童丸この事を聞きて、こゝにては今は叶ふまじ。 醉ひ臥したらばとこそ思ひつれ。 なまさかしき事しいでては、惡しかりなんと思ひて、明日の鞍馬の道にてこそと思ひかへして、天井をのがれ出でて、鞍馬のかたへ向ひて、市原野の邊にて、便宜の所をもとむるに、立ちかくるべき所なし。 野飼の牛のあまたありける中に、殊に大きなるを殺して、路次に引きふせて、牛の腹をかきやぶりてその中に入りて、目ばかり見出して待ちけり。 頼光、案の如く來りけり。

定通・季武　共に平氏、前にあつた公時・綱を合せて頼光の四天王といふ

浄衣に太刀をぞはきたりける。綱・公時・定通・季武等、皆共にありけり。頼光、馬をひかへて、野のけしき興あり。牛その數あり。おのおの牛追ふものあらばや」といはれければ、四天王のともがら、我も我もとかけて射けり。誠に興ありてぞ見えける。その中に、綱いかゞ思ひけん、とがり箭をぬきて、死にたる牛にむかひて、弓を引きけり。人あやしと見る所に、牛の腹のほどをさして、矢をはなちたるに、死にたる牛ゆす〳〵とはたらきて、腹の内より、大の童打刀をぬきて走り出で、頼光にかゝりけり。見れば、鬼童丸なりけり。矢を射たてられながら、猶事ともせず、敵に向ひけり。頼光は少しもさわがず、太刀をぬきて、鬼童丸が頭を打ちおとしてけり。やがてもたふれず、打刀を抜きて、鞍のまへつわを突きたり。さて頭はむながいにくひつきたりけりとなん。死ぬるまで猛くいかめしう

貞任、宗任　安倍氏

鎮守府　陸中國膽澤郡膽澤城、今字佐村に遺址がある

衣川の館　同國同郡衣川村

侍りけるよし、語りつたへたり。まことなることにや。さて頼光は、それより歸りにけり。（巻九）

二　衣のたて

伊豫守源頼義朝臣、貞任・宗任等をせむる間、陸奥に十二年の夏秋を送りけり。鎮守府をたちて、秋田の城にうつりけるに、雪ふりて、軍のをのこどもの鎧、皆白妙になりにけり。衣川の館、岸高く川ありければ、楯をいただきて冑にかさね、筏をくみて責め戰ふに、貞任等堪へずして、遂に城の後よりのがれ落ちけり。一男八幡太郎義家、衣川に追ひたて責めふせて、「きたなくも後をば見するものかな。しばし引きかへせ、物いはん」といはれたりければ、貞任見かへりたりけるに、

宇治殿
關白藤原頼通

匡房
大江氏

江帥
大江匡房

「衣のたてはほころびにけり」

といへりけり。貞任、くつばみをやすらへ、しころをふりむけて、

「年を經し糸のみだれのくるしさに」

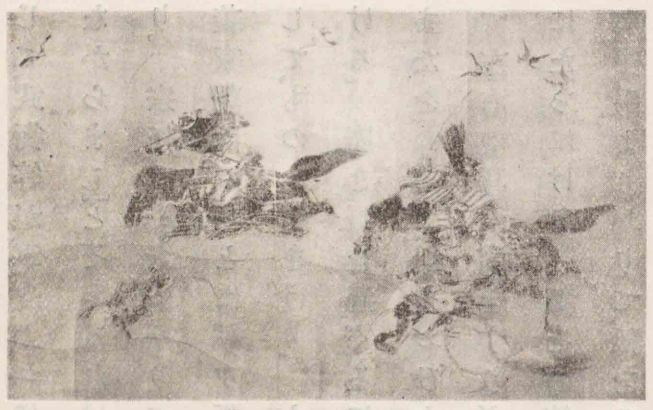
とつけたりけり。その時義家、はげたる箭をさしはづして歸りにけり。さばかりのたゝかひの中に、やさしかりけることかな。

同朝臣、十二年の合戰の後、宇治殿へ參りて、戰の間の物語申しけるを、匡房卿よく〳〵聞きて、「器量はかしこき武者なれども、なほ軍の道をばしらぬ」と、獨言にいはれけるを、義家の郎等聞きて、けやけきことを宣ふ人かなとおもひたりけり。さるほどに、江帥出でられけるに、やがて義家も出でけるに、郎等、「かゝる事をこそ宣ひつれ」と語りければ、「定めて樣あらん」といひて、車に乘られける所へ、すゝみよりて會釋せられけり。やがて弟子になりて、それより常にまう

永保の合戰
後三年の役

金澤の城
羽後國仙北郡
金澤町

でて、學問せられけり。



後三年繪卷

その後永保の合戰の時、金澤の城をせめけるに、一列の鴈飛びさりて刈田の面におりんとしけるが、俄におどろきて、つらをみだりて飛びかへりけるを、將軍怪しみて、くつばみをおさへて、「先年江帥の教へ給へる事あり。それ軍野に伏す時は、飛鴈つらをやぶる。この野に必ず敵伏したるべし」とて、からめ手をまはすべきよし、下知せらるれば、手を別ちて三方をまく時、あんの如く、三百餘騎をかくしおきたりけり。兩陣亂れあひて戰ふことか

ぎりなし。されどもかねてさとりぬる事なれば、將軍の軍勝に乘じて、武衡等が軍やぶれにけり。「江帥の一言なからましかば、あぶなからまし」とぞいはれける。十二年の合戰に、貞任は討たれにけり。宗任は降人になりて來にければ、ゆるしてつかひけり。嫡男義家朝臣のもとに朝夕祗候しけり。或日義家朝臣、宗任一人を具して、ものへ行きけり。主從ともに狩裝束にて、うつぼをぞおへりける。廣き野を過ぐるに、狐一疋走りけり。義家うつぼよりかりまたをぬきて、狐をおひかけけり。射殺さんはむざんなりと思ひて、左右の耳の間をすりざまに、尻へ射たりければ、箭は狐の前の土にたちにけり。狐その箭にふせがれて、たふれて、やがて死にけり。宗任馬よりおりて、狐をひきあげて見るに、箭もたゝぬに死にたれば、そのことをいふに、義家見て、「憶して死にたるなり。殺さじとて

こそ射はあてね。今いきかへりなん。その時放つべし」といひけり。即ち箭をとりてまゐらせければ、やがて宗任して、うつぼにささせ給ひけり。他の郎等是を見て、「あぶなくもおはするものかな。降人に參りたりとも、本の意趣は殘りたらんものを、脇をそらして矢をさゝする事、あぶなきことなり。思ひきる害心もあらばいかが」とぞかたぶきける。（卷九）

仁和寺
山城國葛野郡花園村、新院は御弟の仁和寺の門主覺性法親王の許に預けられ給うたのである
二十三日
七月

保元物語

三卷。保元元年に起つた約一箇月間の戰亂を記した軍記物語であるが、記事は前後六十二年にわたつてゐる。作者は未詳なるも、葉室大納言時長とするもの、中原師梁とするもの、源喩僧正とするもの、諸説がある。鎌倉時代の初期に成つたものといはれてゐるが、これも正しくは不明であるといふ外はない。

一　新院御遷幸

さる程に、けふ藏人右少辨資長、綸言を承りて、仁和寺へ參り、明くる日二十三日、新院を讃岐の國へ遷し奉るべき由を奏聞す。院も都を出でさせ給ふべき由をば內々聞し召しけれども、けふあすとは思し召さざる所に、まさしく勅使參りて、事定まりしかば、御心細く

住の江
住吉、攝津國東成郡

故院
鳥羽院

安樂壽院
鳥羽にある、鳥羽院を葬り奉りたる處

思し召しけるあまりに、かくぞ口ずさみ給ひける。

都には今宵ばかりぞ住の江の
きし道おりぬいかで罪見し

明くれば二十三日、いまだ夜深きに、仁和寺を出でさせ給ふ。夜もほの〴〵と明け行けば、鳥羽殿を過ぎさせ給ふとて、重成を召されて、「田中殿へ參りて、故院の御墓所を拜み、今を限の暇をも申さんと思ふはいかに。」と仰せ下されければ、重成畏つて、「安き御事にて候へども、宣旨の刻限移り候ひなば、後勘いかゞ。」と恐れ申しければ、「誠に汝が痛み申すも理なり。さらば、安樂壽院の方へ御車を向けて懸けはづすべし。」と仰せければ、即ち牛をはづし、西の方へ押し向け奉れば、只御涙に咽ばせ給ふよそほひのみぞ聞えける。これを承る警固の武士どもも、皆鎧の袖をぞ濡しける。暫くあつて、鳥羽の南

季行 藤原氏

の門へ遣り出だす。國司季行朝臣、御舟幷に武士兩三人を設けて、

草津 山城國紀伊郡

草津にて御舟に乘せ奉る。勅諚なればにや、御舟に召されて後、御屋形の戸には外より錠さしてけり。これを見奉るものは申すに及ばず、怪しの賤の女、猛き武士までも、袖を絞らぬはなかりけり。道すがらもはかゞしく御膳も參らず、打ち解けて御寢もならず、御歎に沈み給へば、御命を保たせ給ふべしとも覺えず。月日の光をも御覽ぜず、只烈しき風、荒き波の音ばかり、御耳の底に留りける。急がぬ日數のつもるにも、都の遠ざかりゆく程も思し召し知られて、一の宮の御行方もいかゞあらんと覺束なく、只生きて生を隔てたりとも、これなるらんとぞ思し召す。讃岐に著かせ給ひしかども、國司未だ御所を造りいだされざれば、當國の在廳、散位高遠といふ者の造りたる一宇の堂、松山といふ處に在るにぞ入れ參らせけ

松山 綾歌郡

直島 讃岐國香川郡の海上にある

る。されば事に觸れて都を戀しく思し召しければ、かくなん。

濱千鳥あとは都にかよへども
身は松山に音をのみぞ鳴く（卷三）

二　新院御經沈

さる程に新院は、八月十日御下着の由、國より御請文到來す。この程は松山に御座ありけるが、國司既に直島といふ處に御所を造り出だされければ、それに遷らせおはします。四方の築垣つき、只口一つあけて、日に三度の供御參らする外は、言問ひ奉る人もなし。さらでだに習はぬ鄙の御すまひは悲しきに、秋もやう〳〵闌け行くまゝに、松を拂ふ嵐の音、叢によわる蟲の聲も心ぼそく、夜の雁の遙に海を過ぐるも、故郷にことづてせまほしく、曉の千鳥の洲崎に

金谷
晉の石莊の別莊

烏の頭白く云々
「燕丹求レ歸ヲ。秦王曰。烏頭白。馬生レ角。乃許ス。丹乃仰レ天歎。烏頭即白。馬亦生レ角。」（史記）

さわぐも、御心を碎く種となる。我が身の御歎よりは、僅に附き奉り給へる女房達の伏し沈み給ふに、いよ〳〵御心苦しかりけり。「朕遙に神裔を受けて、天子の位を踐み、太上天皇の尊號を蒙りて、枌楡の居をしめき。先院御在世の間なりしかば、萬機の政を心に任せずといへども、久しく仙洞の樂に誇りき。思出なきにあらず、或は金谷の花を翫び、或は南樓の月に吟じ、既に三十八年を送れり。過ぎにし方を思へば、昨日の夢の如し。如何なる前世の宿業にか、かゝる歎に沈むらん。たとひ烏の頭白くなるとも、歸京の期を知らず。定めて望鄉の鬼とぞならんずらん。偏に後世の御爲」とて五部の大乘經を三年が程に御自筆に遊ばして、貝鐘の音も聞えぬ處に置き奉らんも不便なり、八幡山か、高野山か、若し御許あらば、烏羽の安樂壽院の御墓に置き奉りたき由、平治元年春の頃、仁和寺の

五部の大乘經
華嚴經、大集經、般若經、法華經、涅槃經

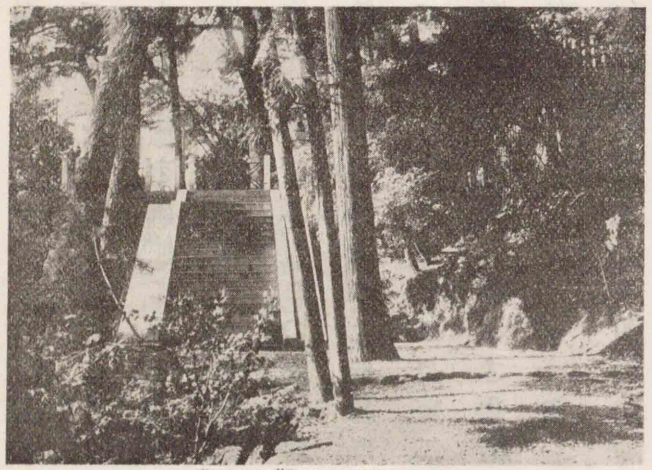
高野山
紀伊國伊都郡

平治元年
二條天皇の御時

御室
仁和寺の門主即ち覺性法親王、鳥羽院の第五の宮

關白
藤原忠通

御室へ申させ給ひしかば、五の宮よりも關白殿へこの由傳へ申させ給ふ。殿下より能き樣に執り申させ給へども、主上終に御許されもなくして、この御經を即ち返し遣はさる。御室より「御とがめ重くおはします故、御手跡なりとも都近く置かれ難き由承り候ふ間、力及ばず」と御返事ありければ、法皇この由聞し召して「口惜しきことかな。我が朝にも限らず、天竺・震旦にも、國を論じ、位を爭ひて、伯父・姪謀叛を起し、兄弟合戰を致す事なきにあらず。我この事を悔い思ひ、惡心懺悔のた


日奉御陵

康頼　平氏

長寛二年　二條天皇の御時

志度　讃岐郡大川郡

白峯　讃岐國綾歌郡松山村

仁安三年　六條天皇の御時

西行法師　鎌倉時代の歌人

めにこの經を書き奉る所なり。然るに筆跡をだに都に置かざる程の儀に至りては力なし。この經を魔道に回向して、魔縁となりて遺恨を散ぜん」と仰せければ、この由都へ聞えて、「御有樣見て參れ」とて、康頼を御使に下されけるが、參りて見奉れば、柿の御衣のすゝけたるに、長頭巾をまきて、大乘經の奥に御誓狀を遊ばして、千尋の底に沈め給ふ。この後は御爪をも切らせ給はず、御髪をも剃らせ給はで、御姿をやつし、悪念に沈みたまひけるこそ恐しけれ。かくて九年おはしまして、長寛二年八月二十六日に、御歳四十六にて、志度といふ處にて隱れさせ給ひけるを、白峯といふ處にて烟になし奉る。

仁安三年の冬の頃、西行法師諸國修行のついでに、白峯の御墓に參りて、つくづくと見參らせ、昔の御事思ひ出だし奉りて、かくぞ詠み

治承元年　高倉天皇の御時

六波羅　京師の五條橋の東にあつて平家の邸宅の地

侍りける。

よしや君むかしの玉の床とても
かゝらん後は何にかはせん

治承元年六月二十九日、追號ありて崇德院とぞ申しける。（卷三）

平治物語

三卷。平治元年に起つた源平二氏の爭亂を記した軍記物語である。作者は大體保元物語と同一人であらうといはれてゐるが、何人か明かでない。鎌倉時代の初期に成つたと思はれる。

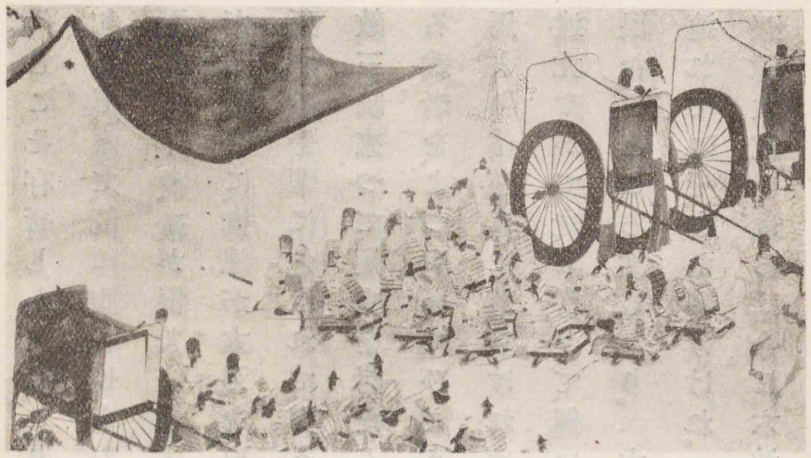
一　六波羅合戰

六波羅には、五條の橋を毀ち寄せ、垣楯に搔きて待つ所に、源氏卽ち

清盛　姓は平、この時は平治元年十二月である
主上　二條天皇
重盛　清盛の長子
惡源太　義平、源義朝の長子
金子十郎家忠　源氏の家臣、武藏の武士
高間三郎　源爲朝の家臣九州の武士
八郎御曹司　源爲朝
同國　武藏國

押し寄せて、鬨を咄と作りければ、清盛鯨波（トキノコエ）に驚きて、物具せられけるが、兜を取りて逆樣に着給へば、侍ども「御兜逆樣に候」と申せば、臆してや見ゆらんと思はれければ、「主上渡らせ給へば、敵の方へ向はば君を後になしまゐらせんがおそれなる間、逆さまには著るぞかし」と宣へば、重盛「何と宣へども、臆して見えられたるな。打立て、者ども」とて五百餘騎にて駈け向けはる。

さる程に惡源太は、その儘六波羅へ寄せらるゝに、一人當千の兵ども眞先に進みて戰ひけり。金子十郎家忠は、保元の合戰にも爲朝の陣に驅け入り、高間三郎兄弟を組んで擊ち、八郎御曹司の矢先を遁れて名を揚げけるが、今度も眞先驅けて戰ひけり。矢種も皆射盡し、弓も引き折り、太刀をも打ち折りければ、折太刀を提げて、あはれ太刀がな、今一合戰せんと思ひて驅け廻る所に、同國の住人足立



主上六波羅行幸（平治物語繪卷）

右馬允遠元馳せ來れば、「これ御覽候へ、足立殿。太刀折りて候。御佩添候はば、御恩に蒙り候はん」と申しければ、折節佩添なかりしかども、「御邊が乞ふが優しきに」とて、先を打たせたる郎等の太刀を取りて、金子にぞ與へける。家忠大きに悅んで、また驅け入りて、敵あまた討ちてけり。

足立が郎等申しけるは、「日來より御先途に立つまじき者と思し召せばこそ、軍の中にて太刀を取りて人には賜はるらめ。この程は最後の御

供とこそ存ぜしかども、これ程に見限られ奉りては、先立ち申すに如かじ。とて、既に腹を切らんと、上帯を押し切りければ、遠元馬より飛んで下り、「汝が恨むる所尤も理なり。しかれども金子が所望もだし難さに、御邊が太刀を取りつるなり。軍をするも主のため、討死する傍輩に乞はれて、與へぬ者や侍らん。暫く待て。」といふ所に、敵三騎來つて、足立を討たんと驅け寄せたり。遠元、眞先に進みたる武者を、よつ引いてひようと射る。その矢誤たず内兜に立つて、馬より眞逆様に落ちければ、殘の二騎は馬を惜んで驅けざりけり。遠元やがて走り寄りて、佩いたる太刀を引き切りておつ取り、「汝が恨むるところ尤もなり。太刀を取らするぞ。」とて、郎等に與へ、打ち連れてこそ、また驅けけれ。

惡源太宣ひけるは、今日六波羅へ寄せて、門の中へ入らざるこそ口

惜しけれ。進めや、者共。とて、究竟の兵五十餘騎、鏑（シコロ）を傾けて驅け入れば、平家の侍防ぎかね、はつと引いてぞ入りにける。義平まづ本意を遂げぬと喜んで、おめき叫んで驅け入り給へり。清盛は北の臺の西の妻戸に軍の下知して居給ひけるが、妻戸の扉に敵の射る矢雨の降る如くに中りければ、清盛宣ひけるは、「防ぐ兵に恥ある侍がなければこそ、これまで敵は近づくらめ。いで〳〵、さらば驅けん。」とて、紺の直垂に、黒絲縅の鎧著、黒塗の太刀を佩き、黒母衣の矢負ひ、塗籠籐の弓持ちて、黒き馬に黒鞍置かせて乘り給へり。上より下まで、おとなしやかに出で立たれけるが、鐙踏ん張り、大音揚げて、「寄手の大將軍は誰人ぞ。かく申すは太宰大貳清盛なり。見參せん。」とて、驅け出でられければ、御曹司これを聞き給ひ、「惡源太義平ここに在り。得たりや、おう。」と叫んで驅く。平家の侍これを見て、筑

孫子　周代の人、呉の兵法家
子房　張良、漢の高祖の謀臣
鎌田　義朝の乳母子正家

後守父子、主馬判官、難波、瀬尾を始として、究竟の兵眞先に馳せ塞がつて戰ひけり。源平互に入り亂れて、こゝを最後と揉み合うたり。孫子が秘せし所、子房が傳ふる所、互に知る道なれば、平家の大勢陽に開きて圍まんとすれども圍まれず、陰に閉ぢて伐たんとすれども伐たれず、千變萬化して、義平三方をまくりたて、面も振らず切つて廻り給ひしかども、源氏は今朝よりのつかれ武士、息をも繼がず攻め戰ふ、平家は新手を入れ替へ入れ替へ、城にかゝりて馬を休め、驅け出で戰ひければ、源氏終に打負けて門より外へ引き退き、やがて河を馳せ渡し、河原を西へぞ引きたりける。

義朝これを見給ひて、「義平が河より西へ引きつるは、家の疵と覺ゆるぞ。今は何時をか期すべき。討死せん。」とて驅けられければ、鎌田馬より飛んで下り、承鞚（ミツツキ）に立ちて申しけるは、「昔より源平弓矢を

崑崙山　支那の西方の大山脈、美玉の產地

取つて、何れも勝劣なしと申せども、殊更源家をば皆人武き事と申し侍り。譬へば栴檀の林に餘木なく、崑崙山には土石悉く美玉なるが如く、源氏に屬する兵までも弓矢取りては名を得たり。それに今朝よりの合戰に、馬泥み、人疲れて、物具に透間多く、矢種盡き、打物折れて、殘る御勢過半は疵を被れり。今敵に驅け合ふとも、かひがひしきことはなくて、雜人の手にかゝり、遠矢に射られて、討たれ給はんことこそ、歎の上の悲なれ。いかにいはんや、大將の御死骸を敵軍の馬の蹄にかけんことをや。姑く何處へも落ちさせ給へ。山林に身を隱しても、御名ばかりを殘し置き、敵に物を思はさせ給はんこそ謀の一つにても候ふべけれ。只今こゝにて討たれさせ給ひなば、敵はいよ〳〵利を得、諸國の源氏は皆力を落しはて、忽ちに敵に屬し候ひなん。たとひ遁れがたくして御自害候ふとも、深

死せる孔明云々
通鑑綱目にある語、蜀の諸葛孔明が陣中にて歿したのを魏の司馬仲達聞きて追撃せしに、蜀軍隊伍を整へて引返し戰はんとした故、仲達は孔明なほ死せずと思ひ恐れて退いたといふ故事

逢坂山
近江國滋賀郡

不破の關
美濃國不破郡

須磨
攝津國武庫郡

明石
播磨國明石郡

越王云々
越王勾踐が吳王夫差と戰つて、會稽山で敗北して降つたが、後吳を滅した

漢祖は滎陽に云々
漢の高祖滎陽で楚の項羽に圍まれて敗走したこと

く隱し參らせて、東國の身方のたのみある樣にこそ御計らひ候はんずれ。死せる孔明生ける仲達を走らかすとこそ申したるに、闇と敵に打ちとられ給はんこと、誠に子孫の御恥辱たるべし。御曹司も定めて御所存あつてぞおはすらん。はや落ちさせ給へ。」と申せば、「東へ行かば逢坂山・不破の關、西海に赴かば、須磨・明石をや過ぐべき。弓矢取る身は、死すべき所を遁れぬれば、なか〳〵最後の恥あるなり。只こゝにて討死せん。」と進み給へば、正家重ねて申すやう、「こは御諚とも覺え候はぬものかな。死を一途に定むるは近くして易く、謀を萬代に殘すは遠くして難しといへり。叶はぬ所にて御腹召されんこと、何の義か候ふべき。越王は會稽に降り、漢祖は滎陽を遁る。皆謀を成して本意を遂げしにあらずや。身を全くして敵を滅すをこそ良將とは申し候へ。とく〳〵延びさせ

八瀨
山城國愛宕郡

信頼卿
藤原氏、中納言右衞門督であつた、平治の亂の發頭人

給へ。」とて、御馬の口を北の方へ押し向けければ、鎌田が取附きたるを力として、兵數多下り立ちて、驅けさせ奉らねば、力なく河原を上りに落ちられけり。（卷二）

二　義朝敗北

義朝八瀨の松原を過ぎられけるに、あとより「やゝ」と呼ぶ聲しければ、何者やらんと見給へば、遙に先へ延びぬらんと覺えつる信頼卿追ひつきて、「もし軍に負けて東國へ落ちん時は、信頼をも連れてくだらんとこそ聞えしか。心變りかや」と宣へば、義朝餘りの憎さに腹を据ゑかねて、「日本一の不覺人、かゝる大事を思ひ立ちて、一軍だにせずして、わが身滅び、人をも失ふにこそ。面（オモテ）つれなう物をば宣ふものかな」とて、持ちたる鞭を以て、信頼の弓手の頰先をしたゝか

平治物語（山田鬼齋作）

に打たれけり。信頼この返事をもし給はず、誠に臆したる體にて、頻りに鞭目を押し撫で押し撫でぞせられける。乳母子式部大輔助吉これを見て、「何者なれば督殿をばかくは申すぞ。我人（ヒト）どもが心剛ならば、など軍には勝たずして、負けて東國へは下るぞ」といひければ、義朝「あの男に物ないはせそ。討つて捨てよ」と宣ひければ鎌田兵衛「何でふ只今さることの候ふべき。敵や續き候ふらん。

横河 比叡山の一坊

龍華越 大原より近江へ越える山

義隆 義朝の伯父

朝長 義朝の第二子

延びさせ給へ」とて行く所に、横河法師、上下四五百人、「信頼、義朝が落つるなる。擊ち留めん」とて、龍華越に逆茂木引き、垣楯搔いて待ちかけたり。三十餘騎の兵各〻馬より飛び下り飛び下り、手々に逆茂木をば物ともせず、引き伏せ引き伏せ通る所に、大衆の中よりさし詰めひき詰め散々に射たりければ、陸奥六郎義隆首の骨を射られて、馬より逆樣に落ちられてけり。中宮大夫進朝長も弓手の股をしたゝかに射附けられて、鐙を踏みかね給ひければ、義朝「大夫は矢に中りつるな。常に鎧づきをせよ。裏かゝすな」と宣へば、その矢引きかなぐつて捨て、「さも候はず。陸奥六郎殿こそ、痛手負はせ給ひ候ひつれ」とて、さあらぬ體にて馬をぞ早められける。（巻二）

三　義朝野間下向

二十九日
十二月
長田莊司忠致
鎌田正家の妻の父

同じき二十九日に、尾張の國知多郡野間の内海に著き給ふ。長田莊司忠致うけ取り奉りて、樣々にもてなし申せども、「御馬を參らせよ。急ぎ御通りあるべし。」と宣ひければ、「せめて三日の御祝過ぎてこそ御立ち候ふべけれ。」とて頻りに留め奉れば、力なく逗留し給ふ。さる程に長田莊司、子息先生景致を近づけて、「さてもこの殿をば通しや奉る、これにて擊ち申すべきか。いかに。」といふに、景致申しけるは、「東國へ下りたまふとも、人よも助けまゐらせじ。人の功名になさんよりも、これにて討ち奉りて、平家の見參に入れ、義朝の知行分をも申したまはらば、子孫繁昌にてこそ候はんずれ。」といひければ、「尤も然るべし。但し名將の御事なれば、小勢なりとも、討ち奉らんこと大事なり。」と申せば、「御湯ひかせ給へとて、湯殿へ賺し入れ奉りて、橘七五郎は近國に無雙の大力なれば、組手なるべし、彌七兵衞、

頭殿
義朝は左馬頭であつた
金王丸
義朝の家臣
玄光法師
義朝の妾延壽の母大炊の弟
美濃國の住人
正月三日
平治二年

濱田三郎は手利なれば、刺し殺し參らすべし。鎌田をば内へ召されて、酒を強ひ伏せ、軍の樣を問ひ給へ。頭殿擊たれ給ひぬと聞きて走り出でば、妻戸の陰に待ち掛けて、景致斬り伏せ候はん。金王丸と玄光法師をば、遠侍にて若者どもの中に取籠め、ひつ張りて刺し殺し候はんに、何の仔細候ふべき。」と計らへば、湯殿しつらひて、正月三日に、莊司御前に參り、「都の御合戰、道すがらの御辛勞に、御湯召され候へ。」と申せば、「然るべし。」とて、やがて湯殿へ入り給へば、三人の者隙を窺ふに、金王丸御劍を持ちて御垢に參りければ、すべて討つべき樣ぞなき。程經て、「御帷子參らせよ。」といへども、人もなき間、金王丸腹をたて、走り出でけるその隙に、三人の者走り違ひてつと入り、橘七五郎むずと組み奉れば、心得たりとて取つて引寄せ、押し伏せ給ふ所を、二人の者ども左右より寄りて、脇の下を二刀づつ刺し

奉れば、心は猛しと申せども、「鎌田はなきか、金王丸は。」とて、終に空しくなり給ふ。金王丸走り歸つてこれを見て、「につくい奴ばら、一人も餘すまじ。」とて、三人ながら、湯殿の口に斬り伏せたり。鎌田兵衛は忠致に向ひて酒を飲みけるが、この由を聞きて、つい立つ所を、酌取りける男刀を拔いて飛び懸る。正家取つて引き寄せ、その刀を以て二刀刺す所を、後より景致、もと首を擊つて打ち落す。鎌田も今年三十八、頭殿と同年にて失せにけり。玄光法師は、頭殿討たれたまひぬと聞きて、「これは鎌田が業にてぞあるらん。まづ正家を討たん。」とて、薙刀持ちて走り廻りけるが、鎌田もはや討たれぬと聞きて、「さらば長田めを討たばや。」とて、金王丸と二人、面も振らず斬つて廻り、數多の敵斬り伏せて、塗籠の口まで攻め入りけれども、美濃・尾張の習、用心嚴しき故に、帳臺の構したゝかに拵へたれば、力なく、

鷲栖
美濃國養老郡

長田父子をば擊ち得ずして、馬屋に走り入り、馬引きいだし、打乘り、「留めんと思はば留めよ。」と呼びけれども、遠矢少々射懸けたるばかりにて、近づく者なかりしかば、玄光は鷲栖に留り、金王は都へ上りけり。

鎌田が妻女これを聞き、討たれし處に尋ね行き、「われは女の身なれども、全く二心は無きものを、いかに恨めしく思ひたまふらん。親子の中と申せども、われもさこそ思ひ侍れ。飽かぬ中には今日既に別れぬ。情なき親に添ふならば、又も憂き目や見んずらん。同じ道に具し給へ。」とて、しばしは泣き居たりけるが、夫の刀を拔く儘に、胸元に差し當て、うつぶし樣に伏しければ、貫かれてぞ失せにける。忠致左馬頭を討ち奉ることは喜なれども、最愛の女を殺し、歎にこそ沈みけれ。景致、頭殿の御首並に鎌田が首を取り、死骸ども

をば一つ穴に掘りうづむ。いかに勳功を望めばとて、相傳の主を討ち、現在の壻を害しける忠致が所存をば、にくまぬものもなかりけり。（巻三）

祇園精舎 天竺の寺の名

沙羅雙樹 沙羅林中の雙樹、この林中大木二本づつ四方に雙生して、釋迦この樹下にて寂した時に、八本の大木、一本づつ枯れたと云ふ

平家物語

十二巻。別に灌頂巻といふのが一巻ある。保元・平治の二物語の後をうけて、平家の興亡を記した軍記物語で、文章の美しいので世に知られてゐる。作者は諸説あつて明かでないし、又異本も非常に多い。

一　祇園精舎

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者も久しからず、只春の夜の夢の如し。猛

承平、天慶 朱雀天皇の御時

康和 堀河天皇の御時

平治 二條天皇の御時

き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の祿山、これ等は皆舊主先皇の政にも從はず、樂を極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れんことをも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これ等は、驕れることも、猛き心も、皆とりぐ〳〵なりしかども、間近くは、六波羅の入道、前の太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有樣傳へ承るこそ、心も言葉も及ばれね。

平清盛

その先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。かの親王の御子高視王、無位無官にして失せ給ひぬ。その御子高望王の時、始めて平の姓を賜はつて、上總介になり給ひしより以來、忽ちに王氏を出でて、人臣に列なる。その子鎮守府將軍良望、後には國香と改む。國香より正盛に至るまで六代は、諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだ許されず。（巻一）

得長壽院　京都下京區五町邊にあつた

天承　崇德天皇の御時

二　殿上闇討

然るに、忠盛未だ備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長壽院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一體の御佛をすゑ奉らる。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には闕國を賜ふべき由仰せ下さ

上皇　鳥羽院

五節豐明節會　豐明節會とは新嘗祭又は大嘗會の翌日宮中に於て行はれた宴會、五節とはその時行はれた女樂をいふ

家貞　平氏

れける。折節但馬の國のあきたりけるをぞ下されける。上皇猶御感の餘りに、內の昇殿を許さる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。雲の上人これを猜み憤り、同年の十一月二十三日、五節豐明節會の夜、忠盛を闇討にせんとぞ議せられける。忠盛この由を傳へ聞きて、われ右筆の身にあらず、武勇の家に生れて、今不慮の恥に遇はん事、家の爲、身の爲、心憂かるべし。詮ずる所、身を全うして君に仕へ奉れ」といふ本文ありとて、豫て用意を致す。參內の始より、大きなる鞘卷を用意し、束帶の下にしどけなげにさしほらし、火の灰暗き方に向つて、やはらこの刀を拔き出でて、鬚に引き當てられたりけるが、よそよりは氷などの樣にぞ見えける。諸人目をすましけり。又、忠盛の郎黨、左兵衛尉家貞といふ者あり。薄青の狩衣の下に、萌黃縅の腹卷を著、弦袋つけたる太刀脇挾んで、殿上の小庭に畏つて

貫首 藏人頭

うつぼ柱 殿上の階段のきはに、雨水を落すため立てた柱

鈴の綱 殿上から校書殿に渡した綱に鈴を附けたもの、藏人、小舍人を呼ぶ時引く

柏原天皇 桓武天皇を申す

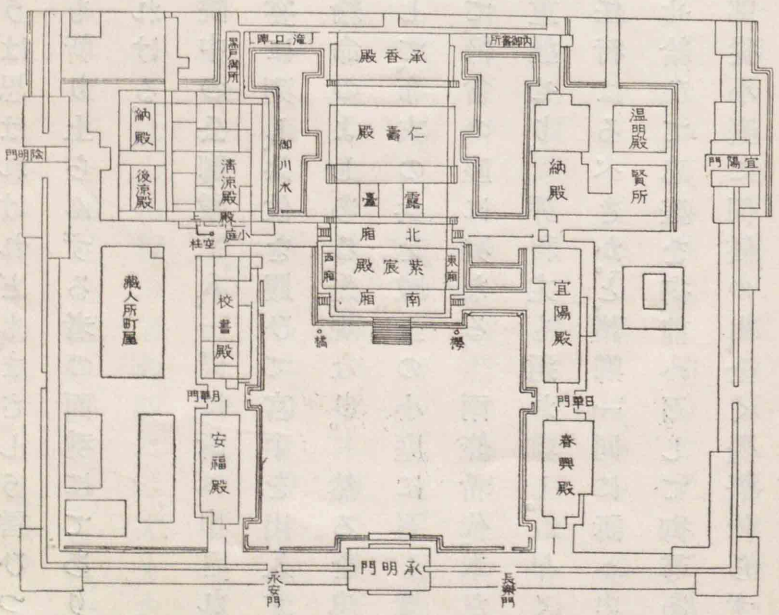
ぞ候ひける。貫首以下、怪しみをなして、「うつぼ柱より内、鈴の綱の邊に布衣の者の候ふは何者ぞ。狼藉なり。疾う〳〵罷り出でよ。」と、六位を以て言はせられたりければ、家貞畏つて申しけるは、「相傳の主、備前守殿の今夜闇討にせられ給ふべき由承つて、そのならん樣を見んとてかくて候ふなり。えこそ出づまじ。」とて、また畏つてぞ候ひける。これらをよしなしとや思はれけん、その夜の闇討なかりけり。

忠盛又御前の召に舞はれけるに、人々拍子をかへて、「伊勢瓶子は素瓶なりけり。」とぞはやされける。かけまくも忝くこの人々は、柏原天皇の御末とは申しながら、中頃は都の住居もうと〳〵しく、地下にのみ振舞ひなつて、伊勢の國に住國深かりしかば、その國の器にことよせて、伊勢平氏とぞ囃されける。その上、忠盛の目の眇まれ

主殿司 主殿寮の女官

たりける故にこそ、かやうには囃されけるなれ。忠盛いかにすべき樣もなくして、御遊も未だ終らざるさきに、御前をまかり出でらるとて、紫宸殿の御後にして、人々の見られける所にて、横たへさゝれたりける腰の刀をば主殿司に預けてぞ出でられける。家貞待ち受け奉りて、「さて如何候ひつるやらん。」と申し

紫宸殿清涼殿圖



ければ、かうともいはまほしうは思はれけれども、まさしう言ひつる程ならば、やがて殿上までも斬り上らんずる者の面魂にてありし間、「別の事なし」とぞ答へられける。

案の如く、五節果てにしかば、院中の公卿殿上人、一同に訴へ申されけるは、「それ雄劍を帶して公宴に列し、兵仗を賜ひて宮中を出入するは、皆これ格式の例を守る綸命のよしある先規なり。然るを忠盛朝臣、或は年來の郎從と號して、布衣の兵を殿上の小庭に召し置き、或は腰の刀を横たへさして、節會の座に列なる。兩條希代、未だ聞かざる狼藉なり。事既に重疊せり。罪科尤も遁れ難し。早く殿上の御簡を削つて、闕官停任行はるべきか」と、諸卿一同に訴へ申されければ、上皇大いに驚かせ給ひて、忠盛を御前へ召して御尋あり。陳じ申されけるは、「まづ、郎從小庭に伺候の由、全く覺悟仕らず。

但し近日人々相巧まるゝ旨、仔細あるかの間、年來の家人事を傳へ聞くによりて、その恥を助けんがために、忠盛には知らせずして竊に參候の條、力及ばざる次第なり。もし咎あるべくば、かの身召し進らすべきか。次に刀のことは、主殿司に預け置き候ひをはんぬ。これを召し出だされ、刀の實否によつて咎の左右行はるべきか」と申されたりければ、「この儀尤も然るべし」とて、急ぎかの刀を召し出でて叡覽あるに、上は鞘卷の黑う塗つたりけるが、中は木刀に銀箔をぞ押したりける。「當座の恥辱を遁れんがために、刀を帶するよしあらはすといへども、後日の訴訟を存じて、木刀を帶しける用意の程こそ神妙なれ。弓箭にたづさはらん程の者の謀には、尤もかうこそあらまほしけれ。かねてはまた郎從小庭に伺候のこと、かつうは武士の郎黨のならひなり。忠盛が咎にあらず」とて、却つて

六月九日
治承四年

新都
福原

源氏の大將
源氏物語の主人公

須磨
攝津國武庫郡

明石
播磨國明石郡

淡路の迫門
明石海峽

繪島が磯
淡路の北端

白浦
紀伊國日高郡

吹上・和歌の浦
紀伊國海草郡

叡感に預りし上は、あへて罪過の沙汰はなかりけり。（巻一）

三　月見

六月九日の日、新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやう〳〵半になり行けば、福原の新都にまし〳〵ける人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大將の昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石の浦傳ひ、淡路の迫門を押しわたり、繪島が磯の月を見る。或は白浦・吹上・和歌の浦、住吉・難波・高砂、尾上の月の曙を、眺めて歸る人もあり。舊都に殘る人人は、伏見・廣澤の月を見る。中にも德大寺の左大將實定卿は、舊き都の月を戀ひつゝ、八月十日あまりに福原よりぞ上り給ふ。

住吉・難波
攝津國東成郡

高砂・尾上
播磨國加古郡

伏見
山城國紀伊郡

廣澤
山城國葛野郡

實定
藤原氏

近衛河原
鷹司の下、近衛通の東

大宮
皇太后藤原多子、實定の妹

何事も皆變り果てて、稀にのこる家は、門前草深くして庭上露滋し。蓬が杣、淺茅が原、鳥のふしどと荒れ果てて、蟲の聲々うらみつゝ、黄菊・紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名殘とては、近衛河原の大宮ばかりぞまし〳〵ける。大將その御所へ參り、まづ隨身を以て惣門を叩かせらるれば、内より女房の聲にて、「誰ぞや、蓬生の露打ちはらふ人もなき處に」と咎むれば、「これは、福原より大將殿の御のぼり候」と申す。「さ侍らば、惣門は錠のさゝれて候ふぞ。東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將、「さらば」とて東の小門よりぞ參られける。

大宮は御つれ〴〵に昔をや思し召し出でさせ給ひけん、南面の御格子あげさせ、御琵琶遊ばされける所へ、大將つと參られたれば、暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、「夢かや、現か。これへ、これへ」とぞ仰

右兵衛佐
源頼朝

せける。昔今の物語どもしたまひて後、小夜もやう〳〵更け行けば、舊き都の荒れゆくを、今様にこそうたはれけれ。

舊きみやこを來て見れば　淺茅が原とぞあれにける
月のひかりはくまなくて　あき風のみぞ身にはしむ

と押しかへし押しかへし、三返歌ひすまされたりければ、大宮を始めたてまつりて御所中の女房たち、みな袖をぞぬらされける。さるほどに、夜もやう〳〵明け行けば、大將いとま申しつゝ、福原へぞ歸られける。（卷五）

五　富士川

さる程に、右兵衛佐殿謀叛の由、頻りに風聞ありしかば、福原には公卿僉議ありて、「今一日も勢の附かぬ先に、急ぎ討手を下さるべし」と

維盛
平重盛の嫡子

忠度
平清盛の弟

忠清
藤原氏

九月十八日
治承四年

清見が關
庵原郡

手越
駿河國安倍郡

宇津の谷
駿河國志太郡と安倍郡との境にある山道

足柄の山
駿河國と相模國とに跨る

て、大將軍には小松權亮少將維盛、副將軍には薩摩守忠度、侍大將には上總守忠清を先として、都合その勢三萬餘騎、九月十八日に新都を立ちて、明くる十九日には舊都に着き、やがて同じき二十日の日、東國へこそ赴かれけれ。或は野原の露に宿を借り、或は高峯の苔に旅寢をし、山を越え、河を重ね、日數經れば、十月十六日には、駿河國清見が關にぞ着き給ふ。都をば三萬餘騎にて出でたれども、路次の兵附き添ひて、七萬餘騎とぞ聞えし。先陣は蒲原・富士川に進み、後陣は未だ手越・宇津の谷に支へたり。

大將軍權亮少將維盛、侍大將上總守忠清を召して、「維盛が存知には、足柄の山打ち越え、廣みへ出でて軍をせん」とはやれども、上總守申しけるは、「伊豆・駿河の勢の參るべきだに、いまだ一騎も見え候はず。身方の御勢七萬餘騎とは申せども、國々の驅武者、馬も人も皆疲れ

黄瀬川　駿河國駿東郡

浮島が原　駿東郡沼津と富士郡鈴川との間の平原

長井　武藏國、今埼玉縣八里郡長井村附近

果てて候ふ。東國は草も木も、兵衞佐に從ひ附きて候ふなれば、何十萬騎か候ふらん。只富士川を前にあてて、身方の御勢をまたせ給ふべうもや候ふらん」と申しければ、力及ばでゆらへたり。

さる程に、兵衞佐賴朝鎌倉を立ちて、足柄の山打ち越え、黄瀬川にこそ着き給へ。甲斐・信濃の源氏ども、馳せ來つて一つになる。駿河の國浮島が原にて勢揃あり、都合その勢二十萬騎とぞ記したる。大將軍權亮少將維盛、東國の案内者とて、長井の齋藤別當實盛を召して、「汝程の强弓、精兵、八箇國にいか程あるぞ」と問ひ給へば、齋藤別當嘲笑ひて、「さ候へば、君は實盛を大矢と思し召され候ふにこそ。僅か十三束をこそ仕り候へ。實盛ほど射候ふものは、八箇國にはいくらも候。大矢と申す定の者の、十五束に劣りて引くは候はず。弓の强さも、したゝかなる者の五六人して張り候。斯樣の精兵共

が射候へば、鎧の二三領は容易うかけず射通し候。馬に乘りて落つる道を知らず。惡所を馳すれど、馬を倒さず。軍はまた親も討たれよ、子も討たれよ、死にぬれば、乘り越え乘り越え戰ひ候。西國の軍と申すは、すべてその儀候はず。親討たれぬれば引き退き、佛事孝養し、忌明けて寄せ、子討たれぬれば、その憂歎とて寄せ候はず。兵粮盡きぬれば、春は田作り、秋刈り收めて寄せ、夏は暑しと厭ひ、冬は寒しと嫌ひ候。東國の軍と申すは、すべてその儀候はず。その上甲斐・信濃の源氏等、案内は知りたり、富士の裾より、搦手にや廻り候はんずらん。かやうに申せば、大將軍の御心を臆せさせ參らせんとて申すとや思し召され候はん。その儀にては候はず。但し軍は勢の多少に依り候はず、大將軍の謀によるとこそ申し傳へて候へ」と申しければ、これを聞く兵共、皆震ひおのゝきあへりけり。

さる程に、同じき廿四日の卯の刻に、富士川にて源平の矢合とぞ定めける。廿三日の夜に入りて、平家の兵ども源氏の陣を見渡せば、伊豆・駿河の人民、百姓等、軍に恐れて、或は野に入り、山に隱れ、或は船に取り乘つて海・河に泛びたるが、いとなみの火の見えけるを、「あなおびたゞしの源氏の陣の遠火の多さよ。實にも、野も、山も、海も、河も、皆武者にてありけり。如何せん」とぞあきれける。その夜の夜半ばかり、富士の沼にいくらもありける水

富士川（東海道名所圖繪）

尾張川　墨股川を指す　墨股川は尾張國と美濃國との境にある

鳥どもが、何にかは驚きたりけん、一度にはつと立ちける羽音の、雷・大風などのやうに聞えければ、平家の兵共、「あはや、源氏の大勢の向ひたるは。昨日齋藤別當が申しつるやうに、甲斐・信濃の源氏等、富士の裾より搦手へや廻り候ふらん。敵何十萬騎かあるらん。取り籠められては叶ふまじ。こゝをば落ちて、尾張川墨股を防げや」。とて、取る物も取りあへず、我先に我先にと落ち行きける。餘りにあわて騷ぎて、弓取る者は矢を知らず、矢取る者は弓を知らず。我が馬には人乘り、人の馬には我乘り、繫ぎたる馬に乘りて馳すれば、杙を廻る事限なし。

同じき廿四日の卯の刻に、源氏二十萬騎、富士川に押し寄せて、天も響き、大地も搖ぐばかりに、鬨をぞ三箇度作りける。平家の方には、靜まりかへりて音もせず。人を入れて見せければ、「皆落ちて候」と

宗盛
清盛の第二子

申す。或は敵の忘れたる鎧取りて參る者もあり、或は平家の棄て置きたる大幕取りて歸る者もあり。「凡そ平家の陣には、蠅だにも翔り候はず」と申す。兵衛佐急ぎ馬よりおり、冑を脱ぎ、手水うがひをして、王城の方を伏し拜み、「これは全く頼朝が私の高名にはあらず、偏に八幡大菩薩の御計らひなり」とぞ宣ひける。猶も續きて攻むべかりしかども、後もさすがおぼつかなしとて、駿河の國より鎌倉へぞ歸られける。

さる程に、落書ども多かりけり。都の大將軍をば宗盛といひ、討手の大將をば權亮といふ間、平家をひらやによみなして、

ひらやなるむねもりいかに騒ぐらん
柱とたのむすけをおとして

ふじ川の瀬々の岩越す水よりも

二十三日
養和元年二月

はやくも落つる伊勢平氏かな。（卷五）

五　入道逝去

同じき二十三日、院の殿上にて、俄に公卿僉議あり。前右大將宗盛卿進み出でて申しけるは、「今度、坂東へ討手向うたりといへども、させる高名したることもなし。今度は宗盛大將軍を承つて、東國・北國の兇徒等を追討すべき」由申されければ、諸卿色代して、「宗盛卿の申す條、ゆゝしう候ひなんず」とぞ申されける。法皇大いに御感ありけり。公卿・殿上人も、武官に備り、少しも弓箭に携はらんほどの人々は、宗盛を大將軍として、東國、北國の兇徒等を追討すべきよし仰せ下さる。

同じき二十七日、門出して既に打立たんとし給ひける夜半ばかり

より、入道相國違例の心地とて、留り給ひぬ。明くる二十八日、重病を受け給へりと聞えしかば、京中・六波羅、犇めきあへり。「すは、しつるは、さ見つる事よ」とぞ囁きける。入道相國病つき給へる日より して、湯水も喉へ入れられず、身の内の熱きことは、火を焚くが如し。臥し給へる所、四五間が内へ入るものは、熱さ堪へ難し。唯宣ふこととては、「あた、あた」とばかりなり。誠にたゞごととも見え給はず。餘りの堪へがたさにや、比叡山より千手井の水を汲み下し、石の船に湛へ、それに下りて冷え給へば、水夥しう沸き上つて、程なく湯にぞなりにける。もしやと、筧の水をまかすれば、石や鐵などの燒きたるやうに、水迸つて寄りつかず。自らあたる水は、ほむらとなつて燃えければ、黑煙殿中にみち〳〵て、ほのほ渦卷いてぞ上りける。

二位殿 平清盛の室、時子

閏二月二日の日、二位殿、熱さ堪へがたけれども、入道相國の御枕に

寄つて、「御有樣見奉るに、日に添へて賴少うこそ見えさせおはしませ。物の少しも覺えさせ給ふ時、思し召す事あらば、仰せ置かれよ」。とぞ宣ひける。入道相國、日來はさしもゆゝしうおはせしかども、今はの時にもなりしかば、世にも苦しげにて、息の下にて宣ひけるは、「當家は、保元・平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも一天の君の御外戚として、丞相の位に至り、榮華既に子孫にのこす。今生の望は一事も思ひ置くことなし。唯思ひ置くこととては、兵衞佐賴朝が首を見ざりつることこそ、何よりもまた本意なけれ。われ如何にもなりなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、賴朝が首を刎ねて、我が墓の前に懸くべし。それぞ今生、後生の孝養にてあらんずるぞ」と宣ひけるこそ、いとゞ罪深うは聞えし。

もしや助ると、板に水を置いて、ふし轉び給へども、助る心地もし給はず。同じき四日の日、悶絶躃地(ヒキクチ)して、遂にあつち死にぞし給ひける。馬・車の馳せ違ふ音は、天も響き、大地も搖ぐばかりなり。一天の君、萬乘の主のいかなる御事ましますとも、これには爭でか勝るべき。今年は六十四にぞなられける。同じき七日の日、愛宕にて煙になし奉り、骨をば圓實法眼頸にかけ、攝津の國へ下り、經の島にぞ納めける。さしも日本一州に名を揚げ、威を振ひし人なれども、身は一時の煙となりて、都の空へ立ち上り、戸は暫しやすらひて、濱の眞砂に戲れつゝ、空しき土とぞなり給ふ。（卷六）

愛宕 京都の東、東山の西なる一帶の地、こゝに鳥邊山といふ墓地がある

經の島 兵庫附近、今の北濱の地

落ち行く勢 壽永四年五月二十一日、加賀國江沼郡篠原で平氏と源義仲と戰つて平氏は大敗した

六　實盛最後

落ち行く勢の中に、武藏の國の住人、長井の齋藤別當實盛は、存ずる

旨ありければ、赤地の錦の直垂に、萠黃縅の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、金作の太刀を佩き、二十四さいたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乘つたりけるが、身方の勢は落ちゆけども、唯一騎返し合はせ返し合はせ防ぎ戰ふ。木曾殿の方より手塚太郎進み出で、「あな、やさし。如何なる人にて渡らせ給へば、身方の御勢は皆落ち行き候ふに、唯一騎殘らせ給ひたるこそ優に覺え候へ。名告らせ給へ」と詞をかけければ、「先づかういふ和殿は誰ぞ。」「信濃國の住人、手塚太郎金刺光盛」とこそ名告つたれ。齋藤別當、「さては互によき敵。但し和殿を下ぐるにはあらず。存ずる旨あれば、名告ることはあるまじきぞ。寄れ、組まう、手塚」とて馳せ並ぶる所に、手塚が郎黨主を討たせじと、中にへだたり、齋藤別當に押並べて、むずと組む。齋藤別當、「あつぱれ、おの

手塚太郎 義仲の將光盛

れは日本一の剛の者と組んでうずよなうれ」とて、我が乗つたりける鞍の前輪に押しつけて、些ともはたらかさず、首かき切つて棄てける。手塚太郎、郎黨が討たるゝを見て、弓手に廻り合ひ、鎧の草摺ひき上げて二刀刺し、弱る所を組んで伏す。齋藤別當心は猛う思へども、軍にはし疲れぬ、手は負ひつ、その上老武者にてはあり、手塚が下にぞなりにける。

手塚太郎、馳せ來る郎黨に首とらせ、木曾殿の御前に參り、畏つて、「光盛こそ奇異の曲者と組んで、討つて參つて候へ。侍かと見候へば、錦の直垂を着て候。又大將軍かと見候へば、續く勢も候はず。『名告れ、名告れ。』とせめ候ひつれども、遂に名告り候はず。聲は坂東聲にて候ひつる」と申しければ、木曾殿「あつぱれ、これは齋藤別當にてあるござんなれ。それならんには、義仲が上野へ越えたりし時、を

桶口次郎兼光　義仲の傳なる中原兼遠の長男

さなめに見しかば、白髮の糟生なつしぞかし。今ははや七十にも餘り、白髮にこそなりぬらんに、鬢・髭の黑きこそ怪しけれ。樋口次郎兼光は、年來馴れ遊びて見知りたるらん。樋口召せ」とて召されけり。

樋口次郎唯一目見て、「あな無慚、齋藤別當にて候ひけり」とて、涙を流す。木曾殿「それならんには、はや七十にも餘り、白髮にこそなりぬらんに、鬢・髭の黑きはいかに」と宣へば、やゝあつて、樋口次郎涙を抑へて申しけるは、「さ候へば、その樣を申し上げんと仕り候ふが、餘りに哀に覺え候ひて、先づ不覺の涙のこぼれ候ひけるぞや。されば弓矢取は、いさゝかの所にても、思ひ出の詞をばかねてつかひ置くべきことにて候ひけるぞや。齋藤別當、常は兼光にあひて物語し候ひしは、『六十に餘りて、軍の陣へ向はん時は、鬢・髭を黑う染めて若

大臣殿
内大臣宗盛

やがうと思ふなり。その故は、若殿原に爭うて、先を駈けんもおとなげなし。又老武者とて人の侮らんも口惜しかるべし。』と申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へ。と申しければ、木曾殿、「さもあらん。」とて、洗はせて御覽ずれば白髮にこそなりにけれ。

又齋藤別當錦の直垂を着けることも、最後の暇申に大臣殿へ參つて、「かう申せば實盛が身一つにては候はねども、先年坂東へ罷り下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上つて候ひしこと、老の後の恥辱、只この事に候。今度北國へ罷り下り候はば、定めて討死仕り候ふべし。實盛もとは越前の國の者にて候ひしが、近年御領につけられて、武藏の國長井に居住仕り候ひき。事のたとへの候ふぞかし、故鄕へは錦を着て歸る

朱買臣
漢の人、はじめ家貧にして後に故鄕會稽の太守となる

判官
源義經

と申す事の候へば、何か苦しう候ふべき、錦の直垂を御免候へかし。と申しければ、大臣殿、「やさしうも申したりけるものかな。」とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし。昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山にひるがへし、今の齋藤別當實盛は、その名を北國のちまたに揚ぐとかや。朽ちせぬ空しき名のみ留めおいて、屍は越路の末の塵となるこそあはれなれ。（卷七）

七　那須與一

さる程に、阿波・讃岐に、平家を背いて源氏を待ちける兵共、あそこの嶺、こゝの洞より、十四五騎、二十騎、うち連れうち連れ馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず。」とて、源氏引き退く所に、沖より尋常に飾つたる小船一艘

汀へ向けて漕ぎ寄せ、渚より七八段許にもなりしかば、船を横様になす。あれはいかにと見る所に、船の中より、年の齢十八九許なる女房の、柳の五衣に、紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出だしたるを、船のせがいに挾み立て、陸に向ひてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに」と宣へば、「射よとにこそ候ふらめ。但し、大將軍の矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候ふらん」と申しければ、判官、「身方に射つべき仁は誰かある」と問ひ給へば、「手だれ共多う候ふ中に、下野の國の住人那須太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候」と申す。判官、「證據があるか」。「さん候。かけ鳥などを爭うて、三つに二つは必ず射落し候」と申しければ、判官、「さらば與一呼べ」とて召されけり。

與一その頃は未だ二十ばかりの男なり。褐の直垂に、萌黃縅の鎧著て、二十四さいたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓脇に挾み、冑をば脱いで高紐に懸け、判官の御前に畏る。判官、「いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし」と宣へば、與一、「仕るとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、ながき身方の御弓矢の瑕にて候ふべし。一定仕らうずる仁に仰せ付けらるべうもや候ふらん」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者共は、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これよりとう〳〵鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。與一、重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はば、外れんをば存じ候はず、御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ」とて、御前を罷り立ち、黑き馬の太う逞しきに、金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取り

二月十八日
元暦二年

日光權現
下野國日光山にある二荒神社

宇都宮
二荒神社別宮がある

湯泉大明神
同國那須郡那須山にある

直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方の兵共、與一の後を遙に見送つて、「この若者、一定仕らうずると覺え候」と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。

矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入つたりけれども、なほ扇の間は七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日、酉の刻ばかりの事なるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ波も高かりけり。船はゆり上げゆりすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏轡を並べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふことなし。與一目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り、自害

して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢はづさせ給ふな」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつぴいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴して、誤たず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日のかゞやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ搖られけるを、沖には平家舷をたゝいてどよめきけり。（卷十一）

增鏡

大鏡、水鏡と共に三鏡と稱せられる假名文歴史の傑作である。後鳥羽天皇から後醍醐天皇まで十五代百五十年の事を記したもので、作者は一條冬良といふも明かでない。吉野朝廷時代の作であらう。

一　實朝の死

新院の御位のはじめつかた、正治元年正月、頼朝はあづまにて頭おろして、同じき十三日年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下にもちひられて、二十年ばかりや過ぎぬらん。北の方は、さきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹にをの子二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立ち繼ぎて、建仁元年六月二十二日從二位、同

新院　土御門上皇

北の方　二位尼政子

日將軍の宣旨を賜はる。又の年左衞門督になさる。かゝれども、少しおちゐぬ心ばへなどありて、やう〳〵兵ども背き〳〵にぞなりにける。

時政は遠江守といひて、故大將のありし時より私の後見なりしを、まいて今はうまごの世なれば、いよ〳〵身重く勢そふこと限なくて、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時、次郎は義時といへり。次郎は心も猛く魂まされる者にて、左衞門督をばふさはしからずおもひて、弟の實朝の君に附き從ひて、思ひ構ふる事などもありけり。督は日にそへて人にもそむけられ行くに、いとゝみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中のこり多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ世をば讓りけれど、う

故大將　頼朝、建久元年、右近衞大將に任ぜられた

けひく者なし。入道はかの病つくろはんとて、鎌倉より伊豆の國へいでゆあびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ處にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。

さて今は偏に、實朝、故大將の跡をうけつぎて、つかさ・位滯ることなく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月二十二日正二位せしは、閑院の内裏造れる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬のつかさをぞつけられける。その年やがて内大臣になりても、猶大將もとのまゝなり。父にもやゝ立ち勝りていみじかりき。この大臣は大方心ばへうるはしく、猛くも優しくもよろづめやすければ、ことはりにも過ぎて武士の靡き從ふさま、父にも超えたり。いかなる時にかありけん、

修善寺 田方郡

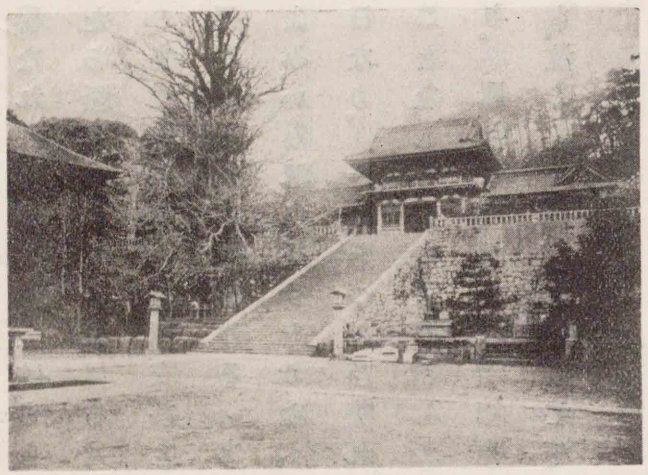
閑院の内裏 京都二條の南西洞院の西一町にあつた

左馬のつかさ 左馬寮の御監（ゴゲン）御監は頭の上の官

山はさけ海はあせなん世なりとも
君にふた心わがあらめやも

とぞ詠みける。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞあとを繼ぎける。故左衛門督の子にて、公曉といふ大德あり、親の討たれにしことを、いかでかやすき心あらん、いかならん時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣また右大臣にあがりて、大饗など珍しくあづまにて行ふ。



鶴岡八幡宮

尊者 大饗の時に招く首席の客

京より尊者を始め上達部・殿上人多くとぶらひいましけり。さて

鎌倉に移し奉れる八幡

今の鎌倉鶴岡八幡宮、本社はもと山城の男山八幡を勸請したものである

鎌倉に移し奉れる八幡の御社に神拜にまうづる、いといかめしき響なれば、國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。たち騒ぎのゝしる者、見る人も多かるなかに、かの大德打紛れて女のまねをして、白き薄衣ひきをり、大臣の車よりおるゝ程をさしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首を打落しぬ。その程のとよみ、いみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月二十七日なり。そこらつどひ集れるものども、たゞあきれたるより外のことなし。京にも聞召しおどろく。世の中火をけちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣く〳〵袖をしぼりてぞ上りける。（新島もり）

二　後嵯峨天皇

阿波院の宮

後嵯峨天皇、御母は通子源通親

- 通宗
  - 通子
- 通方
- 承明門院
- 女子

曆仁

四條天皇の時（一八九九）

憍曇彌

釋迦の姨母

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院の宮は、おとなび給ふまゝに、御心ばへもいときやうさくに、御かたちもいとうるはしく、けだかくやんごとなき御有樣なれば、なべて世の人もいとあたらしき事に思ひ聞えけり。大納言さへ曆仁の頃失せにしかば、いよいよ眞心につかうまつる人もなく、心細げにて何を待つとしもなく、かゝづらひておはしますも、人わろくあぢきなう思さるべし。御母は、土御門の內の大臣通親の御子に宰相の中將通宗とて若くて失せにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば、宰相のはらからの姫君ぞ、御乳母のやうにて、憍曇彌（ケウドンミ）の釋迦佛養ひ奉りけん心ちしておはしける。二つにて父帝に別れ奉り給ひしかば、御面影だに覺え給はねど、なほこの世の中におはすと思されしまでは、おのづから逢ひ見奉るやうもやなど、人知れず稚き御心にかゝ

承明門院　土御門天皇の御母、阿波院の宮の御祖母

仁治二年（一九〇一）

土御門の宮　阿波院の宮

城興寺の宮僧正眞性　以仁王の御子天台座主

女院　承明門院

石清水の社　山城國綴喜郡石清水八幡宮

椿葉の影　徳是北辰椿葉之影再改。尊猶南面松花之色十廻（本朝文粹、大江朝綱）

りて思しわたりけるに、十二の御年かとよ、かくれさせ給ひぬと傳へ聞き給ひし後は、いよ〳〵世のうさを思しくんじつゝ、いとまめだちてのみおはしますを、承明門院は心苦しう悲しと見奉り給ふ。はかなく明け暮れて、仁治二年にもなりにけり。土御門の宮は二十にあまり給ひぬれど、御冠のさたもなし。城興寺の宮僧正眞性と聞ゆる、「御弟子に。」とかたらひ申し給ひければ、さやうにもと思して、女院にもほのめかし申させ給ひけるを、「いとあるまじき事。」とのみ諫め聞えさせ給ふ。その冬の頃、宮いたう忍びて、石清水の社に詣でさせ給ひ、御念誦のどかにし給ひて、少しまどろませ給へるに、神殿のうちに、「椿葉の影再び改る。」と、いとあざやかにけ高き聲にてうちずんじ給ふと聞きて御覽じあげたれば、明方の空澄みわたれるに、星の光もけざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる御

内の上　四條天皇

將軍　藤原頼經

大殿　藤原道家

夢ならんと、あやしく思さるれど、人にも宣はず、とまれかくまれと愈〻御學問をぞせさせ給ふ。

年もかへりぬ。春の初はおしなべて、ほど〳〵につけたる家々の身の祝など、心ゆきほこらしげなるに、睦月の五日より、内の上、例ならぬ御事にて、七日の節會にも御帳にもつかせ給はねば、いとさうざうしく人々おぼしあへるに、九日の曉かくれさせ給ひぬとてのしり合へる、いとあさましともいふばかりなし。皆人あきれ惑ひて、なか〳〵涙だにいでこず。いまだ御つぎもおはしまさず、また御はらからの宮などもわたらせ給はねば、世の中いかになり行かんずるにかと、たどりあへるさまなり。さてしもやはにて、東へぞ告げやりける。

將軍は大殿の御子、今は大納言と聞ゆ。御後見は承久に上りたり

泰時 義時の子
時房 義時の弟
若宮の社 鶴岡八幡宮の若宮
佐渡院 順徳院
修明門院 順徳院の御母
白河 京都賀茂川の東の地

し泰時朝臣なり。時房朝臣と一所にて、小弓射させ酒もりなどして、心とけたる程なりけるに、京よりのはしり馬といへば、何事ならんと驚きながら、使召寄せて聞くに、いとあさまし。さりとてあるべきならねば、その席よりやがて神事はじめて、若宮の社にて鬮(クジ)をぞとりける。

その程都には、いとうかびたる事ども、心のひき〳〵いひしろふ。「佐渡院の宮たちにや」など聞えければ、修明門院にも御心ときめきして、内々その御用意などし給ふ。承明門院も、もしやなど、さまざま御祈し給ふ。あづまの使、都に入るよし聞ゆる日は、兩女院より白河に人を立てて、いづ方へか參ると見せられけるぞ理に、げに今見ゆべき事なれども、物の心もとなきは、さ覺ゆるわざぞかしと、例の口すげみてほゝゑむ。

義景 安達氏
定通 内大臣源定通

日ぐらし待たれて、城介義景といふもの三條河原に打出でて、「承明門院のおはしますなる院はいづくぞ」と、かの院より立てられたる青侍の、いとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心ち現とも覺えず、しか〳〵と申すまゝに、土御門殿へ參りたれど、門は葺つよくかため、扉もさびつき、柱根朽ちてあかざりけるを、郎等どもにとかくせさせて、内に參りて見まはせば、庭には草深く青き苔のみむして、松風より外はこたふるものなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の、御弟を子にし給へりし定通のおとゞばかりぞ、何となくおのづからの事もやと思ひて、なえばめる烏帽子直衣にて候ひ給ひけるが、中門に出でて對面し給ふ。義景はきり戸のわきに畏りてぞはべりける。「阿波院の御子御位に」と申して出でぬ。院の中の人々、上下夢の心ちして、物にぞあたりまどひける。仁治三年正

月十九日の事なり。世の人のこゝち皆驚きあわてて、おしかへし此方に參りつどふ馬・車の響きさわぐ世のおとなひを、四辻殿にはあさましう、なか〳〵物おぼしまさるべし。又の日やがて御元服せさせ給ふ。ひきいれに左大臣まゐり給ふ。理髮、頭辨定嗣つかうまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小路殿へうつらせ給ひて、閑院殿より劍璽などわたさる。踐祚の儀式いとめでたし。（三神山）

四辻殿　修明門院の御所

左大臣　藤原良實

閑院殿　先帝卽ち四條天皇の皇后

太平記

四十卷。花園天皇の御代から後村上天皇の御代までの五十餘年間の戰亂を記した書で、文章のすぐれた軍記物語として世に知られてゐる。作者も出來た年代も明かでない。

一　主上笠置を御沒落

さる程に類火東西より吹き覆ひて、餘煙皇居に懸りければ、主上を始め參らせて、宮々卿相雲客、皆步跣（カチハダシ）なる體にて、いづくを指すとも なく、足に任せて落ち行き給ふ。この人々、はじめ一二町が程こそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく、道闇くして、敵の鬨の聲此處彼處に聞えければ、次第に別れ〳〵になつて後には、たゞ藤房・季房二人より外は、主上の御手を引きまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變

笠置　山城國相樂郡

主上　後醍醐天皇

藤房・季房　藤原氏、共に宣房の子

十善　不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見

赤坂 河内國南河内郡、金剛山の西麓

へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。如何にもして夜の内に赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道の側なる青塚の陰に御身を隱させ給ひて、寒草の疎かなるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうし

笠置山

て夜晝三日に、山城多賀の郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。藤房・季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今は如何なる目に逢ふとも逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、うつゝの夢に伏したまふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞し召して、木蔭に立ち寄らせ給ひたれば、下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを主上御覽ぜられて、

（都名所圖繪）

さしてゆく笠置の山を出でしより
あめが下にはかくれがもなし

藤房卿涙をおさへて、

いかにせんたのむ蔭とて立ちよれば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ

山城の國の住人深須入道・松井藏人、二人はこの邊の案内者なりければ、山々峯々殘る所なく搜しける間、皇居隱なく尋ね出だされさせ給ふ。主上誠に怖しげなる御氣色にて、「汝等心ある者ならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ」と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、「あはれこの君を隱し奉りて、義兵を擧げばや」と思ひけれども、後につゞける松井が所存知りがたかりける間、事の漏れ易くして、道の成りがたからんことを憚りて、もだしけるこそう

内山 大和國山邊郡朝和村

殷湯夏臺に囚はれ 夏の桀王が、殷の湯王を捕へて、夏臺に幽囚せし故事

越王會稽に云々 越王勾踐、吳王夫差のために破られ、遂に會稽山にて降伏せし故事

十月二日 元弘元年

平等院 山城國の宇治にある

關東の兩大將 大佛貞直、金澤貞冬

持明院新帝 光嚴院

たてけれ。俄の事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せまゐらせて、まづ南都の內山へ入れ奉る。その體たゞ殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞き、これを見る人ごとに袖をぬらさずといふことなかりけり。

十月二日、六波羅の北方、常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路を警固仕りて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將京へは入らずして、直ちに宇治へ參り向ひて、龍顏に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給ひて、持明院新帝へ進らすべきよし奏聞す。主上藤房以て仰せ出だされけるは、「三種の神器は古より、繼體の君位を天に授けさせ給ふ時、みづからこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣ありて、暫く天下を掌に握る者ありといへども、いま

だこの三種の重器をみづから擅にして、新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は、山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよもわが國の守とならせ給はぬことあらじ。寶劍は、武家の輩若し天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、みづからその刄の上に伏させ給はんずる爲に、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も言葉なうして退出す。翌日に、龍駕を廻らして六波羅へ成しまゐらせんとしけるを、前々臨幸の儀式ならでは、還幸なるまじきよしを強ひて仰せ出だされける間、力なく鳳輦の用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留ありてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事變りて、鳳輦は數萬の武

天上の五衰
衣服垢穢。頭上華萎。身體臭穢。腋下汗流。不レ樂二本座一

人間の一炊
昔、支那の邯鄲といふ處にて、盧生といふ少年が黄粱を炊ぐ間に、假睡して、五十年の榮華の夢を見たといふ故事

中宮
御名禧子、藤原實兼の女

士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿・傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ、河原をのぼりに、六波羅へと急がせたまへば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに座して、百司禮儀の粧をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきにくだらせ給ひて、萬卒守禦のきびしきに御心を惱まされ、時移り、事去り、樂盡きて、悲來る。天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御すまひ、いつしか思し召しいだす御事多きをりふし、時雨の音一通り、軒端の月に過ぎけるを聞し召して、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ
音を聞くにも袖はぬれけり

四五日あつて、中宮の御方より、御琵琶をまゐらせられけるに御文

あり。御覽ずれば、

思ひやれ塵のみつもる四つの緒に
拂ひもあへずかゝる涙を

引きかへして御返事ありけるに、

涙ゆゑなかばの月は曇るとも
共に見し夜の影は忘れじ（卷三）

醍醐
山城國宇治郡
石川河原
河内國南河内郡

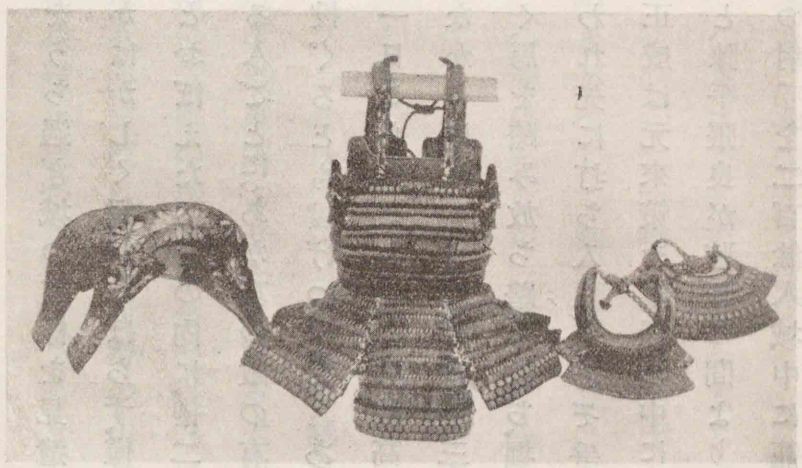
二　赤坂の城軍

遙々と東國より上りたる大勢ども、いまだ近江の國へも入らざる前に、笠置の城既に落ちければ、無念のことに思ひて、一人も京都へは入らず、或は伊賀・伊勢の山を經、或は宇治・醍醐の道をよこぎりて、楠兵衛正成がたてこもりたる赤坂の城へぞ向ひける。石川河原

策を帷幄の中に云々
夫運籌帷幄之中、決勝於千里之外、吾不如子房。（史記）
陳平、張良
漢の高祖の功臣、共に計をよくした
七郎
正季

をうち過ぎ、城の有樣を見遣れば、俄にこしらへたりとおぼえて、はかばかしく堀をもほらず、僅に塀一重塗りて、方一二町には過ぎじとおぼえたるその内に、櫓二三十が程かきならべたり。これを見る人ごとに、「あな、哀の敵の有樣や。この城、われ等が片手に載せて投ぐるとも投げつべし。あはれ、せめて如何なる不思議にも、楠が一日こらへよかし。分捕高名して、恩賞に預らん」と思はぬ者こそなかりけれ。されば、寄手三十萬騎の勢ども、うち寄するとひとしく、馬を踏み放ち踏み放ち、堀の中に飛び入り、櫓の下に立ち並びて、われ先に打ち入らんとぞ爭ひける。

正成は元來策を帷幄の中にめぐらし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平・張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なりければ、究竟の射手を二百餘人城中に籠めて、舍弟の七郎と和田五郎正遠とに



楠正成着用の武具（觀心寺藏）

三百餘騎をさし副へて、よその山にぞ置きたりける。寄手はこれを思ひもよらず、心を一片に取りて、たゞ一揉に揉み落さんと、同時に皆四方の切岸の下につきたりけるところを、櫓の上、矢間の陰より指しつめ引きつめ鏃を支へて射ける間、時の程に手負・死人千餘人に及べり。東國の勢ども案に相違して、「いや〳〵、この城の體たらく、一日二日には落つまじかりけるぞ。暫く陣々を取りて役所を構へ、手分をして合戰を致

せ」とて、攻口を少し引き退き、馬の鞍をおろし、物具を脱ぎて、皆帷幕の中にぞ休み居たりける。

楠七郎・和田五郎、遙の山より見おろして、時刻よしとおもひければ、二百餘騎を二手に分け、東西の山の木蔭より、菊水の旗二流、松の嵐に吹き靡かせ、しづかに馬を歩ませ、嵐煙を捲きて押し寄せたり。東國の勢これを見て、敵か身方かとためらひ怪しむところに、三百餘騎の勢ども、兩方より鬨をどつとつくりて、雲霞の如くにたなびきたる三十萬騎が中へ、魚鱗がかりにかけ入り、東西南北へわつて通り、四方八面を斬つて廻るに、寄手の大勢あきれて陣を成しかねたり。城中より、三の木戸を同時に颯と排きて、二百餘騎鋒を並べて打つて出で、手さきをまはして散々に射る。寄手さしもの大勢なれども、僅の敵に驚き騷ぎて、或は繋げる馬に乘りて、あふれども

東條 河内國

吐田、楢原 大和田南嘉城郡

本間、澁谷 名不詳

進まず、或は弛せる弓に矢をはげて、射んとすれども射られず、物具一領に二三人取りつき、わがよ、人のよと引き合ひける。その間に、主討たるれども従者は知らず、親討たるれども子も助けず、蜘蛛の子を散らすが如く、石川河原へ引き退く。その道五十町が間、馬・物具の棄てたること、足の踏所もなかりければ、東條一郡の者どもは、俄に徳つきてぞ見えたりける。

さしもの東國勢、思の外にし損じて、初度の合戰に負けければ、楠が武略侮りにくしとやおもひけん、吐田・楢原邊に各うち寄せたれども、やがてまた推し寄せんとは擬せず、こゝに暫くひかへて、畿内の案内者を先に立てて、後攻のなきやうに、山を刈り廻り、家を燒き拂ひて、心やすく城を攻むべきなんど評定ありけるを、本間・澁谷の者どもの中に、親討たれ子討たれたる者多かりければ、命生きては何

かせん。よしやわれ等が勢ばかりなりとも、馳せ向つて討死せん」。と憤りける間、諸人皆これに勵まされて、われもわれもと馳せ向ひけり。

かの赤坂の城と申すは、東一方こそ山田の畔重々に高く、少し難所のやうなれ、三方は皆平地に續きたるを堀一重に塀一重塗つたれば、如何なる鬼神が籠りたりとも何程のことかあるべきと、寄手皆これを侮り、また寄るとひとしく堀の中・切岸の下まで攻めつきて、逆茂木を引きのけて打つて入らんとしけれども、城中には音もせず。これは如何樣、昨日の如く手負を多く射出でて、漂ふ所へ後攻の勢を出だして、揉み合はせんずるよと心得て、寄手十萬餘騎を分けて後の山へさし向けて、殘る二十萬騎、稻麻竹葦の如く城を取り卷きてぞ攻めたてける。かゝりけれども、城の中よりは矢の一筋

をも射出でず、更に人ありとも見えざりければ、寄手いよ〳〵氣に乘つて、四方の塀に手をかけ、同時に上り越えんとしけるところを、もとより塀を二重に塗つて、外の塀をば切つて落す樣に拵へたりければ、城の中より四方の塀の釣繩を一度に切つて落したりける間、塀に取りつきたる寄手千餘人、壓しに打たれたるやうにて、目ばかりはたらくところを、大木・大石を投げかけ投げかけ打ちける間、寄手又今日の軍にも七百餘人討たれけり。

東國の勢ども、兩日の合戰に手ごりをして、今は城を攻めんとする者一人もなし。たゞその近邊に陣々を取りて、遠攻にこそしたりけれ。四五日が程はかやうにてありけるが、「あまりに晏然として守り居たるもいふかひなし。『方四町にだに足らぬ平城に、敵四五百人籠つたるを、東八箇國の勢どもが攻めかねて、遠攻したること

觀音經　一卷、姚秦の羅什の譯、法華經普門品の一品分ちたるもの

一心稱名二句の偈　「一心稱二名觀世音菩薩一。即時觀二其音聲一皆得二解脫一。」とあるをいふ

たかに立ちぬと覺えけるが、すはだなる身に少しも立たずして、筈を返して飛びかへる。後にその矢の痕を見れば、正成が年來信じて讀み奉れる觀音經を入れたりける膚の守に矢中つて、一心稱名の二句の偈に、矢先留りけるこそ不思議なれ。正成必死の鏃に死を遁れ、二十餘町落ち延びて後を顧みれば、約束に違はず、はや城の役所どもに火をかけたり。寄手の軍勢火に驚きて、「すはや、城は落ちけるぞ。」とて、勝鬨をつくりて、「餘すな、漏らすな。」と騷動す。燒け鎭まりて後、城中を見れば、大いなる穴の中に炭を積みて、燒け死にたる死骸多し。皆これを見て、「あなあはれや、正成はや自害をしてけり。敵ながらも、弓矢取つて尋常に死にたる者かな。」と、譽めぬ人こそなかりけれ。（卷三）

竹の園生　梁の孝王が竹を愛して三百里の苑に植ゑたといふ故事による、王族のこと

一の人　攝政關白

徒然草

吉田兼好の記した隨筆である。兼好は本姓は卜部氏、吉田に住んでこれを姓とした。後宇多上皇に仕へて左兵衛尉になつたが、俗をすてて風月を友とし、歌人としても名高かつた。

正平五年歿した、年六十八。

一　つれ〴〵なるまゝに

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなくかきつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

いでや、この世に生れては、願はしかるべきことこそおほかめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり、たゞ人も舍

のあさましさよ。』なんど、後までも人に笑はれんことこそ口惜しけれ。前々は逸りのまゝ、楯をもつかず、攻具足をも支度せで攻めたればこそ、そゞろに人は損じつれ。今度はてだてを變へて攻むべし。』とて、面々に持楯をはがせ、その面にいため革を當てて、輙く打たれぬやうに拵へて、かづきつれてぞ攻めたりける。切岸の高さ、堀の深さ幾程もなければ、走りかゝつて塀に附かんことはいとやすく覺えけれども、これもまた釣塀にてやあらんと危みて、さうなく塀には附かず、皆堀の中におり漬つて、熊手を懸けて塀を引きける間、已に引き破られぬべう見えけるところに、城の内より、柄の一二丈長き柄杓に、熱湯の沸きかへりたるを汲んでかけたりける間、冑の天邊、綿上のはづれより、熱湯身に通つて燒け爛れければ、寄手こらへかねて、楯も熊手もうち棄てて、ばつと引きける見苦しさ、矢庭

に死ぬるまでこそなけれども、或は手足を燒かれて立ちあがらず、或は五體を損じて病み臥すもの二三百人に及べり。寄手てだてを變へて攻むれば、城中工を變へて防ぎける間、今はともかくもすべき樣なくして、ただ食攻にすべしとぞ議せられける。かゝりし後はひたすら軍をやめて、おのが陣々に櫓をかき、逆茂木を引きて、遠攻にこそしたりけれ。これにこそなか〳〵城中の兵慰む方もなく、氣も疲れぬる心地してけれ。

楠この城を構へたること暫時のことなりければ、はか〴〵しく兵粮なんど用意もせざれば、合戰始りて城を圍まれたること僅に二十日あまりに、城中兵粮盡きて、今四五日の食を殘せり。かゝりければ、正成諸卒に向ひていひけるは、「この間數箇度の合戰にうち勝つて、敵をほろぼすこと數を知らずといへども、敵大勢なれば、敢て

事に臨んで懼れ云々

必也臨レ事而懼。好謀而成ルレ者也。（論語）

物の數ともせず。城中既に食盡きて、援の兵なし。元來天下の士卒に先立ちて草創の功を志とする上は、節に當り義に臨んでは、命を惜しむべきにあらず。然りと雖も、事に臨んで懼れ、謀を好んでなすは、勇士のする所なり。されば暫くこの城を落ちて、正成自害したる體を敵に知らせんとおもふなり。その故は、正成自害したりと見及ばば、東國勢定めて悅をなして下向すべし。下らば正成打つて出で、又上らば深山に引き入り、四五度が程東國勢を惱ましたらんに、などか退屈せざらん。これ身を全うして敵を滅す計略なり。面々いかゞ計らひ給ふ」といひければ、諸人皆然るべしとぞ同じける。さらばとて、城中に大いなる穴を二丈ばかり掘つて、この間堀の中に多く討たれて臥したる死人を二三十人穴の中に取り入れて、その上に炭薪を積みて、風雨の吹き濺ぐ夜をぞ待ち居た

長崎四郎左衞門尉高貞、東國勢の侍大將

りける。正成が運や天命に叶ひけん、吹く風俄に沙を擧げて、降る雨更に篠を衝くがごとし。夜色窈溟として、氈城皆帷幕を垂る。これぞ待つ所の夜なりければ、城中に人を一人殘し留めて、「われ等落ち延びんこと四五町にもなりぬらんと思はんずる時、城に火をかけよ。」といひ置きて、皆物具を脱ぎ、寄手に紛れて、五人三人別々になり、敵の役所の前、軍勢の枕の上を越えて、しづ〳〵と落ちけり。正成、長崎が旣の前を通りける時、敵これを見つけて、「何者なれば、御役所の前を案内も申さず忍びやかに通るぞ。」と咎めければ、正成、「これは大將の御内の者にて候ふが、道を踏み違へて候ひける。」といひ捨てて、足早にぞ通りける。咎めつる者、「さればこそ怪しき者なれ。如何樣馬盜人と覺ゆるぞ。たゞ射殺せ。」とて、近々と走り寄つて、眞直中をぞ射たりける。その矢正成が臂のかゝりにこたへて、した

木のはし云云

思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ、さるはいと賴もしき業を、只木の端などの樣に思へるこそいといとほしけれ（枕草紙）

清少納言

一條天皇皇后に仕へた女官

人など賜はる際はゆゝしと見ゆ。その子、うまごまでは、はふれにたれど猶なまめかし。それより下つかたは、程につけつゝ、時に逢ひ、したり顏なるも、自らはいみじと思ふらめど、いとくちぞかし。勢猛に罵りたるにつけて、いみじとは見えず。人はかたち有樣の優れたらんこそあらまほしかるべけれ。物ういちいひたる聞きにくからず、愛敬ありて、詞おほからぬこそ、飽かず惜し。

吉田兼好

法師ばかり羨ましからぬ者はあらじ。「人には木のはしのやうに思はるゝよ。」と、清少納言がかけるも、げにさる事

むかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えんこそ、くち惜しかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち心ざまよき人も、ざえなくなりぬれば、品くだり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ本意なきわざなれ。

ありたきことはまことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかたの人のかゞみならんこそいみじかるべけれ。（第一段）

二　此の木なからましかば

栗栖野　山城國宇治郡醍醐寺の邊

神無月の頃、栗栖野といふ處を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、はるかなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ筧のしづくならでは、つゆおとなふも

のなし。閼伽棚に、菊・紅葉など折散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。（第十一段）

三　しばしの旅

いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ目さむる心地すれ。そのわたりこゝかしこ見ありき、田舍びたるところ、山里などは、いと目馴れぬ事のみぞおほかる。都へたより求めて文やる、その事かの事便宜に忘るな。などいひやることをかしけれ。さやうの處にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで善きは善く、能

ある人も常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びて籠りたるもをかし。（第十五段）

四　過ぎにし方

しづかに思へば、よろづに、過ぎにし方のこひしさのみぞせんかたなき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足取りしたため、殘しおかじと思ふ反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪書きすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども心もなく變らず久しき、いとかなし。（第二十九段）

去る者は云云

去者日以疎。（ルニ）（ク）
生者日以親。（ル）（シ）
（文選）

五　人の亡きあと

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰の程、山里などにうつろひて、便あしくせばき所にあまたあひ居て、後の業ども營みあへる、心あわたゞし。日數のはやく過ぐる程ぞ物にも似ぬ。はての日はいと情なう、互にいふこともなく我賢げに物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。

「しかゞの事は、あなかしこ、後のため忌むなることぞ。」などいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心は猶うたておぼゆれ。年月經てもつゆ忘るゝにはあらねど、「去る者は日々に疎し」といへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覺えぬにや、よしなしごといひてうちも笑ひぬ。

骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆も苔蒸し、木の葉降り埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞことゝふよすがなりける。思ひ出でてしのぶ人あらん程こそあらめ、そもまた程なく失せて、聞き傳ふるばかりの末々はあはれとやはおもふ。さるは跡とふわざも絶えぬればいづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人は、あはれと見るべきを、はては嵐に咽びし松も、千年を待たで薪に摧かれ、古き墳は鋤かれて田となりぬ。そのかただに無くなりぬるぞ悲しき。（第三十段）

いづれの人と云々

古墓何代人。不レ知二姓與レ名一。化爲二路傍土一。年々春草生。（白氏文集）

嵐に咽びし松の云々

古墓犂爲レ田。松柏摧爲レ薪。（文選）

六　雪のあした

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべきことありて

文をやるとて、雪のこと何ともいはざりしかへりごとに、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどのひがゝしからん人のおほせらるゝこと聽きいるべきかは。かへすがへすくちをしきみこころなり。」といひたりしこそをかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりのこともわすれがたし。（第三十一段）

七　荒れたる庭

九月廿日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありく事侍りしに、思し出づる所ありて案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露繁きに、わざとならぬ匂しめやかに打ちかをりて、忍びたるけはひ、いと物哀なり。よきほどにて出で給ひぬれど、猶事ざまの優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今すこし押しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。其の人、程なく失せにけりとぞ聞き侍りし。（第三十二段）

八　馴れたる人

朝夕隔なく馴れたる人の、ともあるとき、我に心おき、引繕へるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人も有りぬべけれど、猶げにしく、よき人かなとぞおぼゆる。疎き人の打解けたる事などいひたる、又よしと思ひつきぬべし。（第三十七段）

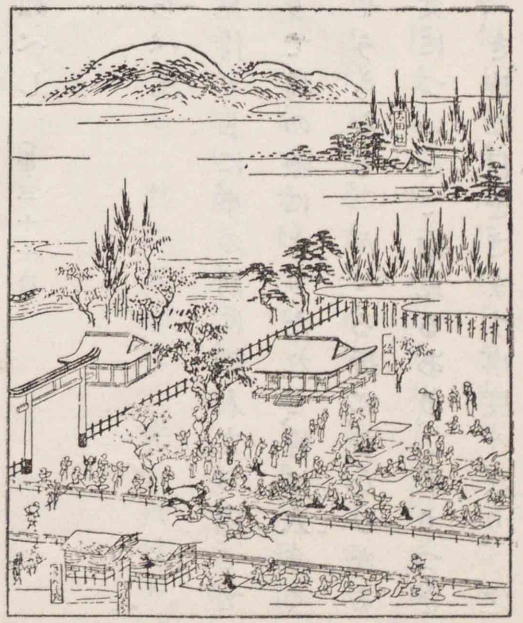
九　賀茂のくらべ馬

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に、雜人立ち隔てて見えざりしかば、おの〳〵おりて埒の際によりたれど、殊に人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、むかひなる楝（アフチ）の木に法師の登りて、木の叉についゐて物見るあり。取りつきながら、いたう睡りて、落ちぬべき時に、目をさます事度々なり。之を見る人嘲りあざみて、「世のしれ者かな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ。」といふに、我が心にふと思ひしまゝに、我ら

が生死の到來たゞ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮らす、愚かなる事は、尙まさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにこそ候ひけれ。もともおろかに候」といひて、皆うしろを見かへりて、「爰へ入らせ給へ」とて、所を去りて、呼入れ侍りにき。

かほどのことわり、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずる事なきにしもあらず。（第四十一段）

賀茂のくらべ馬（都名所圖繪）



一〇　いかなる人なりけん

春のくれつ方、のどやかに艶なる空に、賤しからぬ家の、奥深く、木立物ふりて、庭に散り萎れたる花、見すぐしがたきを、さし入りて見れば、南面の格子みなおろして、さびしげなるに、東にむきて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、打ちとけたれど、心にくくのどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけん。尋ね聞かまほし。（第四十三段）

一一　稲葉の露

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さ

さやかなるわらは一人を具して、遙なる田の中の細道を稻葉の露にそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹止みて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。榻(シヂ)に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しか〳〵の宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや。」といふ。御堂のかたに法師ども參りたり。夜寒の風にさそはれくる空だきものの匂も身に沁む心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の、おひ風よういなど、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。

心のまゝに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲のゆきき

眞乘院
仁和寺に附屬した寺院

も早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。（第四十四段）

一二　いもがしら

眞乘院に盛親(ジヤウシン)僧都とてやんごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物をこのみて多く食ひけり。談義の座にても、大きなる鉢にうづだかくもりて、膝もとにおきて、食ひながら文をもよみけり。わづらふことあるには、七日、二七日など、療治とて籠りゐて、思ふやうによきいもがしらをえらびて、殊におほく食ひて、萬の病をいやしけり。人に食はすることなし。たゞひとりのみぞ食ひける。

きはめて貧しかりけるに、師匠死にざまに錢二百貫と坊ひとつとをゆづりたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋をいもがしらのあしと定めて、京なる人にあづけ置きて、十貫づつ取りよせ

て、いもがしらをともしからずめしけるほどに、又ことやうに用ひることなくて、そのあしみなになりにけり。「三百貫の物をまづしき身にまうけて、かくはからひける、誠に有りがたき道心者なり。」とぞ人申しける。

この僧都みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかろく思ひたる曲者にて、よろづ自由にして、おほかた人に從ふといふことなし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前すゑわたすをまたず、わが前にすゑぬれば、やがてひとり打食ひて、歸りたければひとりつい立ちて行きけり。ときの非時も人にひとしく定めてくはず、わが食ひたき時、夜中にも曉にもくひて、ねぶたければ晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと聽入れず。目さめ

宗
眞言宗

小野道風
村上天皇の時代の人、書の名人

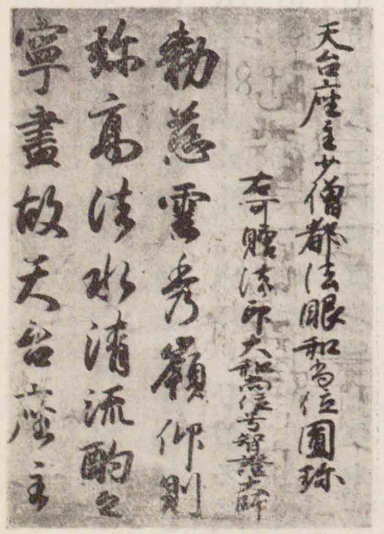
和漢朗詠集
朗詠にうたふ和漢の有名な詩歌の佳句を集めたもの、撰者は藤原公任といはれてゐる

四條大納言
藤原公任、村上天皇の康保三年に生れたこの年道風は歿した

ぬれば幾夜もいねず、心をすましてうそぶきありきなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。徳の至れりけるにや。（第六十段）

一三　道風のかける朗詠集

ある者小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、「御相傳うける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを道風書かんこと、時代や違ひ侍らん。おぼつかなくこそ。」といひければ、「さ候へばこそ世にありがたきものには侍り



小野道風筆蹟

けれ。」とていよ〳〵秘藏しけり。（第八十八段）

一四　猫また

「奥山に猫またといふものありて人を食ふなる。」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫のへあがりて猫またになりて、人とることはあなるものを。」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の行願寺のほとりにありけるが聞きて、「ひとりありかん身は心すべきことにこそ。」と思ひける頃しも、あるところにて夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小河のはたにて、音に聞きし猫またあやまたず足のもとへふとより來て、やがて搔きつくまゝに、頸のほどをくはんとす。肝心もうせて、防がんとするに力もなく、足もたゝず、小川へころび入りて、「助けよや、猫またよや

行願寺　一條通小河新町、賀茂神社の近くにあつた寺

猫またよや。」とさけべば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに。」とて河の中よりいだき起したれば、連歌の賭物とりて扇・小箱など懷に持ちたるも、水に入りぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。飼ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。（第八十九段）

一五　花はさかりに

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方知らぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしほれたる庭などこそ見所おほけれ。歌のことばがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ。」と

たれこめて春の行方知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり（古今集、藤原のよるかの朝臣）

千里の外云云

三五夜中新月色。二千里外故人心（白樂天）

も、「障る事ありて、まからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふ習はさる事なれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし」。などはいふめる。

萬の事も始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるがいと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉のこずゑに見えたる木の間の影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ身に泌みて、心あらん友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

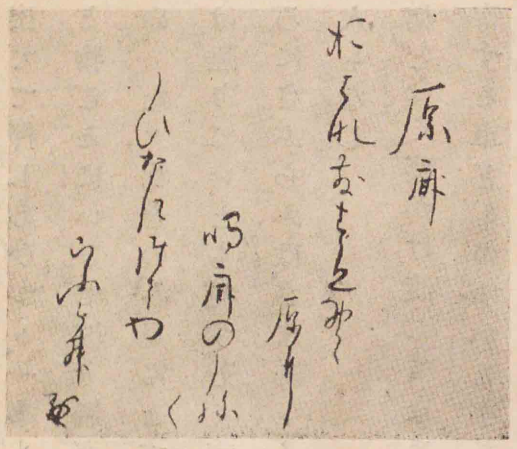
すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをか

兼好筆蹟

お(を)ばな散るすゑ野の原に鳴鹿のまねくかひなきつまやこふらむ

しけれ。

よき人はひとへにすける様にも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢより立ちより、あからめもせずまもりて酒飲み連歌して、はては大きなる枝心なくをり取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、萬の物よそながら見ることなし。



兼好筆蹟

祭

賀茂の祭

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといと遲し。そのほどは、桟敷不用なり」とて、奥なる屋にて酒飲み、物食ひ、圍碁・雙

六などあそびて、桟敷には人を置きたれば、「渡り候」といふ時に、おのおの肝つぶるゝやうに争ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はり出でて押しあひつゝ、一事も見漏らさじとまもりて、とあり、かゝり。と物ごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らんまで」といひて下りぬ。たゞ物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは睡りていとも見ず、若く末々なるは、宮づかへにたちゐ、人のうしろにさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。

何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明けはなれぬ程、しのびて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなど思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくもきら〳〵しくもさまざまに行きかふ見るもつれ〴〵ならず。暮るゝ程には、立て並べつ

舟岡　舟岡山、愛宕郡大宮村にある、古くから火葬場であった

る車ども、所なく並みゐつる人も、いづかたへ行きつらん、程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾・畳も取りはらひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。

かの桟敷の前をこゝら行きかふ人の、見知れるがあまたあるにて知りぬ、世の人数もさのみは多からぬにこそ。この人皆失せなん後、わが身死ぬべきに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大きなるうつはものに水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しといふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都のうちに多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野・舟岡、さらぬ野山にも送る數多かる日はあれど、おくらぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、造りてうち置くほど

なし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。けふまでのがれ來にけるは有りがたき不思議なり。暫しも世をのどかには思ひなんや。兵のいくさに出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世をそむける草の庵には、靜に水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へる、いとはかなし。靜なる山の奥、無常のかたききほひ來らざらんや。その死にのぞめること、いくさの陣にすゝめるにおなじ。（第百三十七段）

一六　世には心得ぬことの多き

世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとには、先づ酒をすゝめて、強ひ飲ませたるを興とすること、いかなる故とも心得ず。飲む人のかほ、いと堪へがたげに眉をひそめ、人目をはかりてすてんと

し、遁げんとするを捉へて引きとゞめて、すゞろに飲ませつれば、うるはしき人も忽ちに狂人となりてをこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らずたふれふす。祝ふべき日などはあさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、物くはずによびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覺えず、おほやけ、わたくしの大事を缺きて、わづらひとなる。人をしてかゝるめを見する事、慈悲もなく禮儀にもそむけり。かくからきめにあひたらん人、ねたく口惜しと思はざらんや。人の國にかゝる習あなりと、これらになき人事にて、傳へ聞きたらんは、あやしく不思議に覺えぬべし。

人の上にて見たるだに心うし。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり、言葉多く、烏帽子ゆがみ、紐はづ

し、脛高くかゝげてようい なき氣色、日ごろの人とも覺えず。女は額髪はれらかにかきやり、まばゆからず顔うちさゝげて打ちわらひ、盃持てる手に取りつき、よからぬ人は肴取りて口にさしあてみづからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出だしておの〳〵歌ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒くきたなき身をかたぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましく憎し。あるは又、わが身いみじき事どもかたはら痛くいひ聞かせ、あるは醉ひ泣きし、下ざまの人はのりあひいさかひて、あさましく、おそろしく、耻がましく、こゝろうき事のみありて、はては許さぬ物どもおし取りて緣よりおち、馬車より落ちてあやまちしつ。物にも乘らぬ際は大路をよろぼひ行きて、築土門の下などに向きて得もいはぬ事どもしちらし、年老い袈裟かけたる法師の、聞えぬ事どもいひ

つゝよろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をしても、この世も後の世も益あるべき業ならばいかゞはせん。この世には過多く、財をうしなひ病をまうく。百藥の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ。うれへを忘るといへど、醉ひたる人ぞ過ぎにし憂さをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智惠をうしなひ、善根を燒くこと火のごとくして惡を增し、よろづの戒をやぶりて、地獄に落つべし。「酒を取りて人に飲ませたる人、五百生が間手なきものに生る。」とこそ、佛は說き給ふなれ。

百藥の長　夫鹽食肴之將。酒百藥之長。（漢書）

酒を取りて云々　與レ人飲ム酒者、五百生無レ手。（梵網）

最明寺入道　北條時頼

平宣時　北條氏、別姓大佛

一七　最明寺入道

平宣時朝臣、老の後むかしがたりに、「最明寺入道、ある宵の間に呼ばるゝことありしに『やがて』と申しながら、直垂のなくてとかくせし

ほどに、また使來りて、直垂などのさぶらはぬにや。夜なれば、ことやうなりともとく。』とありしかば、なえたる直垂、うち〳〵のまゝにてまかりたりしに、銚子にかはらけ取添へてもて出でて、『この酒をひとりたうべんがさう〴〵しければ申しつるなり。肴こそなけれ。人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも求めたまへ。』とありしかば、紙燭さしてくま〴〵求めしほどに、臺所の棚に、小土器の味噌のすこしつきたるを見出でて、『これぞ求めえてさふらふ。』と申ししかば、『事足りなん。』とて、こゝろよく數獻におよびて、興に入られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか。』と申されき。（第二百十五段）

一八 佛はいかなるものにか

八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候らん。」といふ。父がいはく、「佛には人のなりたるなり。」と。またいふ「人は何として佛にはなり候やらん。」と。父また、「佛の教によりてなるなり。」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける佛をば何が教へ候ひける。」と。又答ふ、「それもまたさきの佛の教によりて成りたまふなり。」と。又いふ、「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける。」といふ時、父、「空よりや降りけん、土よりや湧きけん。」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ。」と、諸人に語りて興じき。（第二百四十三段）

昭和副讀本　卷五　終

昭和五年九月二十一日印刷
昭和五年九月二十五日發行
昭和六年一月二十四日修正印刷
昭和六年一月二十七日修正發行

昭和副讀本
全五冊

卷數	定價	昭和六年度臨時定價
卷一	金參拾五錢	金五拾五錢
卷二	金參拾參錢	金五拾貳錢
卷三	金參拾五錢	金五拾五錢
卷四	金參拾錢	金四拾七錢
卷五	金參拾錢	金四拾七錢

著作權所有

著作者　東京市外中野町字大塚一六二五番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　右代表者　倉田八十八
印刷者　東京市神田區錦町三丁目十七番地　白井赫太郎
印刷所　精興社

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院
振替口座(東京)七四二番
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店
振替口座(東京)二八〇九番